

学習指導要領に示す「内容の取扱い」の(3)の「作業的、体験的な学習を重視して実施すること」に照らして、扱いが不適切である。

歴史と生活 衣食住の変化—日本人と洋服を考えてみよう

衣食住の歴史は日常の生活文化と直結しているため、食生活や住生活に関しても、身近な視点からさまざまなテーマを取り上げることができる。ここでは、日本における洋服の拡大・浸透から日本の近代を考えてみよう。

小説『坊ちゃん』から明治の服装を考えよう

夏目漱石が、四国愛媛県の松山中学校に、英語教師として赴任したのは1895(明治28)年のことであった。小説『坊ちゃん』は漱石自身の松山中学校での日々を題材としたものであり、1906(明治39)年に発表された小説である。

赴任した「坊ちゃん」を、はじめからびっくりさせたのが「赤シャツ」を着た中学校の異様な教頭であった。その様子を「此暑いのにフランネルの襯衣を着て居る。いくら薄い地には相違なくとも暑いに極ってる。文学士丈に御苦労千萬な服装をしたもんだ。しかも夫が赤シャツだから人を馬鹿にしてゐる。あとから聞いたら此男は年が年中赤シャツを着るんださうだ。妙な病氣もあった者だ。当人の説明では赤は身体に薬になるから、衛生の爲めにわざわざ誂らへるんださうだが、入らざる心配だ。そんなら序に着物も袴も赤にすればいい。」と書いてある。フランネルは毛織物の一種で起毛するように織ったやわらかい織物で、明治初期の文明開化のころから広く和服の材料としても普及した毛織物であった。「赤シャツ」は、赤い色のフランネルをシャツに仕立てて着ていたのである。「序に着物も袴も赤にす

歴史と生活 衣食住の変化—日本人と洋服を考えてみよう

衣食住の歴史は日常の生活文化と直結しているため、食生活や住生活に関しても、身近な視点からさまざまなテーマを取り上げることができる。ここでは、日本における洋服の拡大・浸透から日本の近代を考えてみよう。

小説『坊ちゃん』から明治の服装を考えよう

日本における洋服の歴史は身近な所からも調べることができる。例えば、学校の図書館に行って、明治時代の小説を読んでも、そのころの服装を考えることができる。高校生に親しまれている夏目漱石の『坊ちゃん』を読んでみよう。

夏目漱石が、四国愛媛県の松山中学校に、英語教師として赴任したのは1895(明治28)年のことであった。小説『坊ちゃん』は漱石自身の松山中学校での日々を題材としたものであり、1906(明治39)年に発表された小説である。

赴任した「坊ちゃん」を、はじめからびっくりさせたのが「赤シャツ」を着た中学校の異様な教頭であった。その様子を、

「此暑いのにブランネルの襦衣を着て居る。いくら薄い地には相違なくとも暑いに極ってる。文学士丈に御苦労千萬な服装をしたもんだ。しかも夫が赤シャツだから人を馬鹿にしてゐる。あとから聞いたら此男は年が年中赤シャツを着るんださうだ。妙な病気もあった者だ。当人の説明では赤は身体に薬になるから、衛生の為にわざわざ誂らへるんださうだが、入らざる心配だ。そんなら序に着物も袴

ればいゝ」という「坊ちゃん」の感想から考えれば、「赤シャツ」は和服の下着として赤いフランネルのシャツを着ていたのであろう。明治時代も後半に入り「ハイカラ」の語が生まれるように、白い糊のりのきいた高襟たかえり（ハイカラー）と洋装ようそうが批判的な側面はあるにしても、高級役人や学者の服装として定着してきた東京からきた「坊ちゃん」には、赤いフランネルのシャツがことに奇妙きみょうに感じられた。そのうえに、夏目漱石は「赤シャツ」を琥珀こはくのパイプをくゆらし、絹のハンカチを持ち、金鎖きんくさりを下げるという全体として和洋折衷わようせっちゅうの珍妙ちんみょうな身なりで描くことで、俗物的ないやらしさを表現した。

「赤シャツ」以外の登場人物の服装をみてみよう。校長の「狸たぬき」は、いつもフロックコートを着ていることで、地方の高級官吏かんりとしての威厳いげんを表現している。「坊ちゃん」は、学校へは洋服で行き、「うらなり」の送別会そうべつかいも洋服で出席している。しかし、宿へ帰ると夏ゆかたは浴衣であり、「赤シャツ」の家へいく時には小倉こくらの袴はかまを着け、日清戦争の祝勝会しゅくしょうかいの余興よきょうを見にいった時は飛白ひはくの袷あわせというように、時と場所に応じて洋服と和服を使いわけている。夏目漱石は服装で人物描写をおこなうとともに、社会的地位やその時の感情まで表現しようとした。一方、小説の読者も登場人物の洋服や和服の着方で人物を描きわけようとした漱石の視点を共有できるまでに洋装に関する意識が定着してきたことがわかっていく。

も赤にすればいい」。

と書いてある。フランネルは毛織物の一種で起毛するように織ったやわらかい織物で、明治初期の文明開化のころから広く和服の材料としても普及した毛織物であった。「赤シャツ」は、赤い色のフランネルをシャツに仕立てて着ていたのである。

「序に着物も袴も赤にすればいい」という「坊ちゃん」の感想から考えれば、「赤シャツ」は和服の下着として赤いフランネルのシャツを着ていたのであろう。明治時代も後半に入り「ハイカラ」の語が生まれるように、白い糊のきいた高襟(ハイカラー)と洋装が批判的な側面はあるにしても、高級役人や学者の服装として定着している東京からきた「坊ちゃん」には、赤いフランネルのシャツがことに奇妙に感じられた。そのうえに、夏目漱石は「赤シャツ」を琥珀のパイプをくゆらし、絹のハンカチを持ち、金鎖を下げるという全体として和洋折衷の珍妙な身なりで描くことで、俗物的ないやしさを表現した。

「赤シャツ」以外の登場人物の服装をみてみよう。校長の「狸」は、いつもフロックコートを着ていることで、地方の高級官吏としての威厳を表現している。「坊ちゃん」は、学校へは洋服で行き、「うらなり」の送別会も洋服で出席している。しかし、宿へ帰ると夏は浴衣であり、「赤シャツ」の家へいく時には小倉の袴を着け、日清戦争の祝勝会の余興を見にいった時は飛白の袴というように、時と場所に応じて洋服と和服を使いわけている。夏目漱石は服装で人物描写をおこなうとともに、社会的地位やその時の感情まで表現しようとした。一方、小説の読者も登場人物の洋服や和服の着方で人物を描きわけようとした漱石の視点を共有できるまでに洋装に関する意識が定着してきたことがわかっていく。

キャプション

フロックコートにシルクハット、ステッキをもつ大隈重信（毎日新聞社提供）

明治時代の洋装はすぐに拡大したのだろうか

ペリーの来航以来、強大な諸列強と対峙しなければならなかった日本は、西洋の軍事力に目を見張った。西洋の軍備・軍隊を見習うことはただちに軍服という洋服に注目させた。江戸幕府や諸藩では、オランダの軍服を参考にしながら和洋折衷のさまざまな軍服がこころみられた。明治維新後の1890(明治3)年に、陸軍がフランス式、海軍がイギリス式に編成されたのにもなって、軍服も両国の形式にならない制定された。軍服はこれ以後たびたび改正されたが、軍服の詰襟ジャケットとズボンという形式は、こののち警察官や鉄道員、郵便配達人といった新しい明治国家をになう仕事にたずさわる人や、学生などの将来のエリート of 制服にも取り入れられた。現在でも続いている黒詰襟に金ボタンという学生服の原型である。また、明治政府は、1872(明治5)年、文武官の宮中における礼服制度を改め、洋装の大礼服(金モールで装飾)や通常礼服(燕尾服)が採用された。さらに1877(明治10)年から文官の略礼服としてフロックコートが加わった。この後、同じ官吏でも地位の高い人は洋服を着るという意識が定着した。シルクハットをかぶり、フロックコートを着、靴音高く歩くのが、身分の高い人の象徴となった。

しかし、洋服はヨーロッパ人の体型に合わせ、欧米の風土のなかで育まれた服装であったため、日本人はなかなかそれに順応できなかった。福沢諭吉によって書かれた『西洋衣食住』(1867年刊)では、下着から上着まで洋服を着る順序が懇切丁寧に解説されている。洋服についているさまざまなポケットの使い方もわか

フロックコートにシルクハット、ステッキをもつ大隈重信。^{おおくましげのぶ}（毎日新聞社提供）

明治時代の洋装はすぐに拡大したのだろうか

ペリーの来航以来、強大な諸列強^{たいじ}と対峙しなければならなかった日本は、西洋の軍事力に目を見張った。西洋の軍備・軍隊を見習うことはただちに軍服^{ぐんぷく}という洋服に注目させた。江戸幕府や諸藩では、オランダの軍服を参考にしながら和洋折衷^{せっちゅう}のさまざまな軍服がこころみられた。明治維新後の1890（明治3）年に、陸軍がフランス式、海軍がイギリス式に編成されたのにもなって、軍服も両国の形式になり制定された。軍服はこれ以後たびたび改正されたが、軍服の詰襟^{つめえり}ジャケットとズボンという形式は、こののち警察官や鉄道員^{ゆうびんはいつにん}、郵便配達人といった新しい明治国家をになう仕事にたずさわる人や、学生などの将来のエリートの制服にも取り入れられた。現在でも続いている黒詰襟に金ボタンという学生服の原型である。また、明治政府は、1872（明治5）年、文武官の宮中^{きゆううちゆう}における礼服制度を改め、洋装の大礼服（金モールで装飾^{りやくれいふく}）や通常礼服（燕尾服）が採用された。さらに1877（明治10）年から文官の略礼服としてフロックコートが加わった。この後、同じ官吏でも地位の高い人は洋服を着るという意識が定着した。シルクハットをかぶり、フロックコートを着、靴音高く歩くのが、身分の高い人の象徴となった。

しかし、洋服はヨーロッパ人の体型に合わせ、欧米の風土のなかで育まれた服装であったため、日本人はなかなかそれに順応^{じゅんおう}できなかった。福沢諭吉によって書かれた『西洋衣食住』^{せいよういしょくじゅう}（1867年刊）では、下着から上着まで洋服を着る順序が懇切丁寧に解説されている。洋服についているさまざまなポケットの使い方もわか

っていなかった。それまでの日本の傘^{かさ}と洋傘^{ようがさ}は、持ち方が逆であることまで説明しなければならなかったのである。ヨーロッパ人から見た日本人の洋服姿は、滑稽なものにうつった。1877(明治 10)年 1 月 1 日の皇居で見た礼服姿についてベルツは、「今日の機会に、西洋の風習の誤った模倣^{もほう}ぶり、しかも醜^{くろテスク}悪なまでの模倣^{もほう}ぶりが、いつの日よりもはっきりと暴露^{ばくろ}された。(中略)気の毒^{きどく}な日本人よ、君たちは言語道断にぶざまな燕尾服^{えんびふく}をぞんざいなズボンの中へ無理に押しこめられているのだ。しかも頭には、たいていは決して似合うことのないシルクハットときている。滅法^{めっぼう}に白い手袋^{てぶくろ}をはめた手は、まるで服に触れるのが恐ろしいかのように、だらりと下げたままである」とその日記に書いた(菅沼竜太郎訳『ベルツの日記』)。明治時代も中期になると、洋服は軍人や警官の職業的機能と、官吏の西洋式の机^{つくえ}と椅子の仕事に合ったものとして、勤務中の公的衣冠として定着したのであった。

女性の洋装は男子^{おとこ}にくらべておくれ、明治政府の高官の夫人^{ふじん}・令嬢^{れいじょう}たちが鹿鳴館^{ろくめいかん}につどうようになってからである。鹿鳴館にあつまった貴婦人たちの洋装は、まもなく東京の女学生の風俗としてとりこまれた。女子教育の改良に熱意をもやしていた文部卿森有礼^{もりありのり}が、文部省直轄^{ちよっかつ}の女子師範学校^{しはん}や女学校の教育を西洋風に切りかえようとして、1885(明治 18)年に女子師範の生徒に洋服を着用させることが決まったからである。

っていなかった。それまでの日本の傘^{かさ}と洋傘^{ようがさ}は、持ち方が逆であることまで説明しなければならなかったのである。ヨーロッパ人から見た日本人の洋服姿は、滑稽なものにうつった。1877(明治10)年1月1日の皇居で見た礼服姿^{グロテスク}についてベルツは、「今日の機会に、西洋の風習の誤った模倣^{もほう}ぶり、しかも醜^{みにく}悪^{わる}なまでの模倣^{もほう}ぶりが、いつの日よりもはっきりと暴露^{ばくろ}された。(中略)気の毒^{きどく}な日本人よ、君たちは言語道断にぶざまな燕尾服^{えんびふく}をぞんざいなズボンの中へ無理に押しこめられているのだ。しかも頭^{あたま}には、たいていは決して似合うことのないシルクハットときている。滅法^{めっぽう}に白い手袋^{てぶくろ}をはめた手は、まるで服に触れるのが恐ろしいかのように、だらりと下げたままである」とその日記に書いた(菅沼竜太郎訳『ベルツの日記』)。

学校で使用している教科書の写真や図版の文明開化の頃の錦絵で、この時代の風俗を調べ、どのような職業や職場から洋服が広がっていったかを考えよう。

明治時代も中期になると、洋服は軍人や警官の職業的機能と、官吏^{つくえ}の西洋式の机^{いす}と椅子の仕事に合ったものとして、勤務中の公的衣類として定着したのであった。

女性の洋装は男性^{ふじん}に比べておくれ、明治政府の高官^{れいじょう}の夫人^{ろくめいかん}・令嬢^{きふじん}たちが鹿鳴館につどうようになってからである。鹿鳴館にあつまった貴婦人たちの洋装は、まもなく東京の女学生の風俗としてとりこまれた。女子教育の改良に熱意をもやしていた文部卿^{もりありのり}森有礼^{ちよつかつ}が、文部省直轄^{しはん}の女子師範学校や女学校の教育を西洋風に切りかえようとして、1885(明治18)年に女子師範の生徒に洋服を着用させることが決まったからである。

明治・大正時代の洋服の浸透はどのようにおこなわれたか

職務や地位を示す公的衣類として拡大していった洋服は、子供や女性に浸透するまでには時間がかかった。ベルツが明治 10 年 1 月 1 日の皇居における滑稽な礼服姿を「それも大人だけではなく、十歳から十二歳の坊やまでが、この道化の犠牲になっている」（『ベルツの日記』）と述べているように、政府高官の男の子が大人の礼服のような洋服を着ていたのがわかる。しかし、身分の高い令嬢も若い女子は明治末期にいたっても和服姿で公式の場にあらわれていた。日本が日露戦争に勝利し、日英同盟の改訂が終わった翌年の 1906 (明治 39) 年、イギリス国王エドワード 7 世の甥のコンノート殿下が明治天皇へガーター勲章を捧呈するために日本を訪れた。その時の首席随員ミッドフォードの日本日記に、有栖川宮家の令嬢がコンノート殿下を招いた夕食会に和服で出席したという。ミッドフォードは「有栖川宮殿下の姫君は大変淑やかな若い方で、まだ十六歳であられたが、その晩、昔ながらの日本の着物を着て出席された。それは他の婦人たちの西洋風の服装と不思議な対照をなしていた (中略) 日本の着物を召された姫君は大変魅力的なご様子で、手を加える必要は全くない」(長岡祥三訳『ミッドフォード日本日記』)と述べ、ガーター勲章捧呈後に催された芝離宮での晩餐会にも「有栖川宮妃殿下は姫君を伴われて出席された。(中略)和服を着ておられたので回って踊るダンスはおできにならなかったがカドリールには加わって踊られた」(同前)と述べられている。上層階級でも女子の洋装はむずかしかった。

こうしたなかでも、明治末ごろから大正にかけて、本格的に洋装化が進んだ。中

明治・大正時代の洋服の浸透はどのようにおこなわれたか

職務や地位を示す公的衣類として拡大していった洋服は、子供や女性に浸透するまでには時間がかかった。ベルツが明治 10 年 1 月 1 日の皇居における滑稽な礼服姿を「それも大人だけではなく、十歳から十二歳の坊やまでが、この道化の犠牲になっている」（『ベルツの日記』）と述べているように、政府高官の男の子が大人の礼服のような洋服を着ていたのがわかる。しかし、身分の高い令嬢も若い女子は明治末期にいたっても和服姿で公式の場にあられていた。日本が日露戦争に勝利し、日英同盟の改訂が終わった翌年の 1906 (明治 39) 年、イギリス国王エドワード 7 世の甥のコンノート殿下が明治天皇へガーター勲章を捧呈するために日本を訪れた。その時の首席随員ミッドフォードの日本日記に、有栖川宮家の令嬢がコンノート殿下を招いた夕食会に和服で出席したという。ミッドフォードは「有栖川宮殿下の姫君は大変淑やかな若い方で、まだ十六歳であられたが、その晩、昔ながらの日本の着物を着て出席された。それは他の婦人たちの西洋風の服装と不思議な対照をなしていた。（中略）日本の着物を召された姫君は大変魅力的なご様子で、手を加える必要は全くない」（長岡祥三訳『ミッドフォード日本日記』）と述べている。上層階級でも女子の洋装はむずかしかった。

こうしたなかでも、明治末ごろから大正にかけて、本格的に洋装化が進んだ。君たちの学校の創立が明治や大正時代ならば、校誌や古い写真を学校の図書館で見よう。

中学校や女学校の制服が洋服になりはじめると、小学生や幼児にも洋服が着られ

学校や女学校の制服が洋服になりはじめると、小学生や幼児にも洋服が着られるようになった。明治末期には、七五三の男児の洋服にラシャの水兵形セーラー服が流行した。女性の洋服も、大正中ごろから子供や女学生など活動性を求める低年齢層から拡大しはじめる。

長野県須坂市にある近世からの豪商田中本家の博物館には、大正時代の流行を反映したおしゃれな男児服や女児服、そして、ストローハットやクローシュなどのかわいい帽子が多数保存されている。この時代の地方ではめずらしい多数の子供服は、東京で購入されたものが多い。田中本家には、東京の百貨店である三越、松屋、白木屋各呉服店の明治後期から大正時代にかけての通信販売の冊子が多数残されており、それによって東京の流行をいちはやくとり入れ、購入したのであろう。しかし、このような子供服は、七五三のセーラー服にみられるように、地方の名望家の子供たちがハレの場で着るものであった。

第一次世界大戦が終わると、都会では子供の外出着として洋服が定着してきた。1927(昭和2)年、日本ではじめて開通した地下鉄の開業ポスター(杉浦非水画)には、半ズボン姿の洋服を着た男児が、プラットホームで地下鉄をまっている都会の風景が描かれている。産業構造の変化にともなって拡大したサラリーマン層の増加で、男性の通勤着として洋服が一般化し、背広に中折れ帽のサラリーマンが都会では目立つようになった。女性の社会的進出にともなって、バスガールや紡績工場の制服として女性の洋服もしだいに拡大したのである。

るようになった。明治末期には、七五三の男児の洋服にラシャの水兵形セーラー服が流行した。女性の洋服も、大正中ごろから子供や女学生など活動性を求める低年齢層から拡大しはじめる。

長野県須坂市にある近世からの豪商田中本家の博物館には、大正時代の流行を反映したおしゃれな男児服や女児服、そして、ストローハットやクローシュなどのかわいい帽子が多数保存されている。この時代の地方ではめずらしい多数の子供服は、東京で購入されたものが多い。田中本家には、東京の百貨店である三越、松屋、白木屋各呉服店の明治後期から大正時代にかけての通信販売の冊子が多数残されており、それによって東京の流行をいち早くとり入れ、購入したのであろう。しかし、このような子供服は、七五三のセーラー服にみられるように、地方の名望家の子供たちがハレの場で着るものであった。

疑問を持ったり、調査を進めようとすれば、インターネットで資料を検索したり、自分の住んでいる地域にある博物館や資料館を訪れ、専門の学芸員の人に聞いてみよう。必要な資料を探してくれたり、調べ方を教えてくれる。

第一次世界大戦が終わると、都会では子供の外出着として洋服が定着してきた。1927(昭和2)年、日本ではじめて開通した地下鉄の開業ポスター(杉浦非水画)には、半ズボン姿の洋服を着た男児が、プラットホームで地下鉄をまっている都会の風景が描かれている。産業構造の変化にともなって拡大したサラリーマン層の増加で、男性の通勤着として洋服が一般化し、背広に中折れ帽のサラリーマンが都会では目立つようになった。女性の社会的進出にともなって、バスガールや紡績工場の制服として女性の洋服もしだいに拡大したのである。

戦時下の服装強制——もんぺと国民服はほんとうに戦争にあったのか？

日本は、満州事変、日中戦争、太平洋戦争と急速に戦時体制を深めていった。国家総動員の名のもとに、国力のすべてを戦争へ注入する時代となった。木綿の代用品のスフは、すぐやぶれてしまう質の悪いものであった。女性たちには、持っている和服を作り直した更生服をつくるのが奨励され、もんぺが「非常時」の着物とされた。

もんぺは、江戸時代から農山村で使われていた作業用の山袴の一種で、ほかにこれといった労働着を持たなかった女性にとって、便利な和服の作業着である。1937（昭和12）年4月5日に公布され、日中戦争開始後の10月1日に施行された本土空襲対策法である防空法制定をきっかけに、防空演習時などに着られる活動的で着脱容易な女性の新しく改良された和服の必要性がさげられた。また、この時代の日本の伝統文化回帰の思想にも合致するものと思われたのである。もんぺをつくる時の裁断は直線的でよく、縫いあわせも適当でよいという利便性もかね備えていた。しかし、もんぺは実際には簡便性でも活動性でも洋服のズボンにおとるものであった。和服の上から着る時には、長い和服の裾を巻き上げてから着る必要があり、腰がふくらんでしまうために、防空演習での梯子上りや屋根にのぼる時にはかえってあぶなかった。

昭和の戦前期、家庭での女性の服装はいぜんとして和服が主流であり、女性の洋服姿まだめずらしかった。まして活動的なズボンをはく女性は少なかったのである。

戦時下の服装強制——もんぺと国民服はほんとうに戦争にあったのか？

日本は、満州事変、日中戦争、太平洋戦争と急速に戦時体制を深めていった。国家総動員の名のもとに、国力のすべてを戦争へ注入する時代となった。木綿の代用品のスフは、すぐやぶれてしまう質の悪いものであった。女性たちには、持っている和服を作り直した更生服をつくるのが奨励され、もんぺが「非常時」の着物とされた。

もんぺは、江戸時代から農山村で使われていた作業用の山袴の一種で、ほかにこれといった労働着を持たなかった女性にとって、便利な和服の作業着である。1937（昭和12）年4月5日に公布され、日中戦争開始後の10月1日に施行された本土空襲対策法である防空法制定をきっかけに、防空演習時などに着られる活動的で着脱容易な女性の新しく改良された和服の必要性がさげられた。また、この時代の日本の伝統文化回帰の思想にも合致するものと思われたのである。もんぺをつくる時の裁断は直線的でよく、縫いあわせも適当でよいという利便性もかね備えていた。しかし、もんぺは実際には簡便性でも活動性でも洋服のズボンにおとるものであった。和服の上から着る時には、長い和服の裾を巻き上げてから着る必要があり、腰がふくらんでしまうために、防空演習での梯子上りや屋根にのぼる時にはかえってあぶなかった。自分の家や近所のおばあさんにもんぺのことばかりでなく、戦争中の衣食住について聞き取り調査をしてみよう。

昭和の戦前期、家庭での女性の服装はいぜんとして和服が主流であり、女性の洋服姿まだめずらしかった。まして活動的なズボンをはく女性は少なかったのである。

戦前における女性の一般的服装と、銃後を支えるという戦時体制でめざされた女性の役割りとの間には大きなギャップが存在していたのである。いわば、その妥協^{だきよう}の産物がもんぺであった。

1940(昭和 15)年、男子の国民服^{こくみんふく}が制定された。国民服は戦時下における精神の昂揚^{こうよう}、服装の合理化、軍人と民間の一体性の強調のもとに男子に強制された。儀礼^{ぎれい}章^{しょう}をつければ宮中参内も許された。男子の洋装化の戦前における到達点^{だつたてん}とっていいであろう。しかし、女性は 1942(昭和 17)年に標準服が決った。女性の標準服には、洋服式と和服式、そして防空服としてのもんぺがあった。政府は、女性の服装^{へいじゆんか}の平準化^{へいじゆんか}が進んでいない中^{なか}で、男子の国民服のように一律的な強制ができずに標準服にした。それでも物不足^{ものぶそく}のなかで、戦争末期にはほとんどの女性がもんぺをはくことを余儀^{よぎ}なくされた。

われわれの着ている洋服の起源を考えてみよう

1945(昭和 20)年、太平洋戦争が終結し平和がもどると、日本社会のなかにアメリカの影響^{しんとう}が浸透した。男女とも洋服が一般化した。戦前、和服だけで生活していた人びとにとって、戦時中に強制された国民服やモンペが、活動的な洋服や女子のスラックスになれるきっかけとなった。経済が復興し、社会が豊かになると世界的な流行がすぐに日本へ入ってきた。女性は世界のファッション雑誌から流行を取り

戦前における女性の一般的服装と、銃後を支えるという戦時体制でめざされた女性の役割りとの間には大きなギャップが存在していたのである。いわば、その妥協^{だきよう}の産物がもんぺであった。

1940(昭和 15)年、男性の国民服^{こくみんふく}が制定された。国民服は戦時下における精神の昂揚^{こうよう}、服装の合理化、軍人と民間の一体性の強調のもとに男性に強制された。儀礼^{ぎれい}章^{しょう}をつければ宮中参内も許された。男性の洋装化の戦前における到達点とっていいであろう。しかし、女性は 1942(昭和 17)年に標準服が決った。女性の標準服には、洋服式と和服式、そして防空服としてのもんぺがあった。政府は、女性の服装の平準化^{へいじゅんか}が進んでいないなかで、男性の国民服のように一律的な強制ができずに標準服にした。それでも物不足^{ものぶそく}のなかで、戦争末期にはほとんどの女性がもんぺをはくことを余儀^{よぎ}なくされた。

われわれの着ている洋服の起源を考えてみよう

1945(昭和 20)年、太平洋戦争が終結し平和がもどると、日本社会のなかにアメリカの影響^{しんとう}が浸透した。男女とも洋服が一般化した。戦前、和服だけで生活していた人びとにとって、戦時中に強制された国民服やモンペが、活動的な洋服や女性のスラックスになれるきっかけとなった。経済が復興し、社会が豊かになると世界的な流行がすぐに日本へ入ってきた。女性は世界のファッション雑誌から流行を取り

入れた。また、1954年の映画『麗^{うるわ}しのサブリーナ』のオードリー・ヘップバーンが着た少し短かめのスラックスはサブリーナ・パンツとしていっきよに流行した。

高度経済成長の時代に入ると、男性も画一的な洋服から脱^{だっ}却^{きゃく}しはじめた。夏の暑い時に着るポロシャツは、もともとポロ競技で着るものであったが、その吸湿性と活動性をみたあるテニス選手が、テニスのウィンブルドン大会(全英オープンテニス)で着てから爆発的に広がったものである。今、何^{なに}気^げなく着ているボタン・ダウンのシャツはアメリカの東部の名門大学の学生が着るものであった。防寒^{ぼうかん}着であるフードのついたダッフルコートや2列のボタンが特徴的な短かめのオーバーであるPコートは、イギリス海軍の防寒着であった。冬に背広^{ばんぐわ}の上から着る活動的なトレンチコートは、第一次世界大戦の時、イギリス陸軍^{りくぐん}が塹壕(トレンチ)用コートとして開発した防水・防寒コートである。現代では男性も女性も、さまざまな国々の洋服を着こなしている。

一方、和服は公式の場における晴^はれ着^ぎとして残った。子供の七五三^{しちごさん}の祝い着や成人式の振り袖^{ふりそで}、結婚式での新郎の羽織袴^{しんろう はおりはかま}や新婦の内掛けである。また、夏の花火大会のような、日常をはなれた楽しみ^{ゆかた}の場で浴衣が復活してきたように、和服にも根強い生命力があったのである。

入れた。また、1954 年の映画『麗^{うるわ}しのサブリナ』のオードリー・ヘップバーンが着た少し短かめのスラックスはサブリナ・パンツとしていっきょに流行した。このように映像に残る資料として、その時代の映画は服装を調べるよき材料にもなるだろう。

高度経済成長の時代に入ると、男性も画^{かく}一的な洋服から脱^{だつ}却^{きやく}しはじめた。夏の暑い時に着るポロシャツは、もともとポロ競技で着るものであったが、その吸湿性と活動性をみたあるテニス選手が、テニスのウィンブルドン大会(全英オープンテニス)で着てから爆発的に広がったものである。今、何気なく着ているボタン・ダウンのシャツはアメリカの東部の名門大学の学生が着るものであった。防寒着であるフードのついたダッフルコートや2列のボタンが特徴的な短かめのオーバーであるPコートは、イギリス海軍の防寒着であった。冬に背広の上から着る活動的なトレンチコートは、第一次世界大戦の時、イギリス陸軍が塹壕^{ざんこう}(トレンチ)用コートとして開発した防水・防寒コートである。現代では男性も女性も、さまざまな国々の洋服を着こなしている。このように私たちが現在着ている服装を調べるには、地元の公立図書館が便利である。被服を教えている家庭科の先生に相談するのもよいでしょう。さらにインターネットを利用して関連の所蔵機関を検索して調べることもできよう。

一方、和服は公式の場における晴れ着^{は ぎ}として残った。子供の七五三^{しちごさん}の祝い着や成人式の振り袖^{ふ そで}、結婚式での新郎の羽織袴^{しんろう はおりはかま}や新婦の内掛け^{しんぶ うちか}である。また、夏の花火大会のような、日常をはなれた楽しみ^{ゆかた}の場で浴衣が復活してきたように、和服にも根強い生命力があったのである。

洋服の歴史をさぐる視点

諸列強との対峙^{たいじ}のために、幕末から日本人がとり入れた洋服は長い間かかって定着してきた。洋服を着こなすための葛藤^{かつとう}や和服への思い入れは、今までみてきたようにさまざまな時代に書かれた小説を分析することで読み取ることができるし、日本を訪れた外国人の記録からも探ることができよう。また、各地の博物館や資料館のなかには各時代の服装や、明治・大正時代の軍服、戦時下の服装を展示している所もあるのでぜひ訪れてみたい。幕末・明治の浮世絵やポスター、近現代の写真集からも、その当時の人びとの衣服がわかる。映画も衣服やファッションを知る材料となろう。また、日本ばかりでなく、それぞれの洋服を生み出した世界の社会状況や時代状況を考えることは、歴史をさぐる確かな目となる。近現代に生きた日本人が、どのような思いでその時代の衣服を着たのかを考えることで、近現代の社会や歴史をより身近かに考えることができるであろう。

食生活や住居の歴史も調べよう

これまで服装について述べてきたが、食生活の歴史を調べる^{そざい}素材としては、食肉やパン・コーヒーの普及、インスタント・レトルト食品の普及などが考えられる。こうした課題を調べるには、図書館や役所で食肉消費の統計を調査し、地域の肉屋さんやパン屋さんからの聞き取り調査をしてみよう。さらに家族からの聞き取りがある。そして自分の地域や家庭のなかで、どのように食生活が洋風化していったか考えてみよう。

住生活については、建物の間取り^{まど}の変化、構造では^{たたみ}畳生活と^{いす}椅子生活の導入などによる生活の変化を調べ、ガスや電気がいつごろ普及し、調理器具の発展との関係を、明治・大正時代の^{すいし}炊事や台所と現代の台所を比較してその違いを調べて、歴史的な見方を体験してみよう。

原

文

歴史と生活 交通・通信の変化—東京の近郊を例にみてみよう

近現代における交通・通信の発達は、人びとの日常生活にどのような影響をもたらしたのであろうか。また、人間・物資・情報の移動の拡大は人びとの活動範囲をどのように変化させたのであろうか。ここでは、東京近郊の千葉県^{かしわ}柏市周辺を例にして、交通・通信の変容をたどってみよう。

歴史と生活 交通・通信の変化—東京の近郊を例にみてみよう

近現代における交通・通信の発達は、人びとの日常生活にどのような影響をもたらしたのであろうか。また、人間・物資・情報の移動の拡大は人びとの活動範囲をどのように変化させたのであろうか。ここでは、東京近郊の千葉県 柏市^{かしわ}周辺を例にして、交通・通信の変容をたどってみよう。

交通の変化の調べ方

交通の発達を調べるには、戦前では地域の図書館へ行って「県史」「市町村史」を読んでみるのがよいだろう。その地域の鉄道のことを書いた本は、図書館では交通や鉄道のコーナーにあることが多い。わからなかい時には、図書館のレファレンスのカウンターを訪ねてみよう。また、戦前の地図と現在の地図を比較することによって地域の変容がわかる場合も多い。多くの市町村では、鉄道の開通や駅の開業、駅前^{駅前}の街並の変化、道路の整備、港湾の修築などを集めた写真集も刊行しているので、交通の発達と地域の変化がどのようにかかわっているのかを視覚的にイメージすることもできよう。市役所や町村役場の広報担当の係へ連絡すると、郷土資料室や市町村の歴史を編集している所を教えてくれる。

原

文

都道府県の中央図書館には、明治時代以来の統計書が保存されていることが多い。それらの残されているさまざまな統計によって、駅の乗降客の推移や貨物の発送・到着の量と種類を調べると、それぞれの地域の性格やその変化がわかる。また、図書館や地元の新聞社に残されている新聞を読んでみよう。駅の開業や新道路開通、あるいは計画が進められた時期の新聞をみると、当時の人びとが地域をどうとらえ、どのように変えていこうとしたかを知ることができる。

〔鉄道などを調べる博物館・資料室〕

- ・交通博物館 〒101-0041 東京都千代田区神田須田町 1-25

電話 03-3251-8418

- ・交通科学博物館 〒552-0001 大阪市港区波除 3-11-10

電話 06-581-5771

- ・電車とバスの博物館 〒213-0002 川崎市高津区二子 631

電話 044-822-9084

- ・近鉄資料館 〒543-0001 大阪市天王寺区上本町 6-1-55

電話 06-775-3361

(このほか、交通・運輸関係の身近にある博物館・資料館などをインターネットで探してみよう)

明治初期の輸送を見てみよう

明治初年まで、全国的に貨物の長距離輸送は海運や河川舟運により、陸路は人びとの往来と短距離の貨物輸送に用いられていた。この地域は太平洋に注ぐ利根川と東京湾に注ぐ江戸川という大きな川にはさまれ、江戸（東京）と水戸を結ぶ水戸街道が、松戸、柏、我孫子とのびていた。地元から江戸に送られる米などは、流山や松戸まで陸送され、船に積まれて江戸川を下ったが、より多かったのはこの地域を通過する貨物である。利根川沿いの河岸（船着き場）には、茨城県方面から利根川や鬼怒川を通ってきた貨物が陸揚げされ、陸路江戸川沿いの流山か松戸まで運ばれ、再び水運にもどった。江戸に向けた鮮魚類の運搬が多かったため、布施から流山にいたる道は「うなぎ道」とよばれ、松戸から手賀沼の南を通って利根川にいたる道は、銚子で水揚げされた魚類が運ばれたところから「生魚街道」とよばれた。利根川と江戸川は流山から 30 km あまり 遡れば行き来できるが、川底が浅くて小型の船しか通れない上、混雑したので、この地域の陸上輸送がおこなわれた。

この地域の水田に適さない土地は利用が進まず、明治初年には旧幕臣やにぎわいを失った東京の町人たちのための開墾地とされたくらいであったから、地域の人びとにとって馬に荷物を積んで運搬する仕事は、貴重な収入源となっていたに違いない。幕末から街道での車両の利用が認められ、明治に入るとまずは人力車、続いて荷車や荷馬車が広く用いられるようになった。そのため、道路が平坦で幅が広いことが求められ、また痛みやすくなった路面の補修も大仕事になった。このため、国道として整備が進んだ水戸街道の利用がふえた。

明治初期の輸送を見てみよう

明治初年まで、全国的に貨物の長距離輸送は海運や河川舟運により、陸路は人びとの往来と短距離の貨物輸送に用いられていた。この地域は太平洋に注ぐ利根川と東京湾に注ぐ江戸川という大きな川にはさまれ、江戸（東京）と水戸を結ぶ水戸街道が、松戸、柏、我孫子とのびていた。地元から江戸に送られる米などは、流山や松戸まで陸送され、船に積まれて江戸川を下ったが、より多かったのはこの地域を通過する貨物である。利根川沿いの河岸（船着き場）には、茨城県方面から利根川や鬼怒川を通ってきた貨物が陸揚げされ、陸路江戸川沿いの流山か松戸まで運ばれ、再び水運にもどった。江戸に向けた鮮魚類の運搬が多かったため、布施から流山にいたる道は「うなぎ道」とよばれ、松戸から手賀沼の南を通って利根川にいたる道は、銚子で水揚げされた魚類が運ばれたところから「生魚街道」とよばれた。利根川と江戸川は流山から 30 km あまり 遡れば行き来できるが、川底が浅くて小型の船しか通れない上、混雑したので、この地域の陸上輸送がおこなわれた。

この地域の水田に適さない土地は利用が進まず、明治初年には旧幕臣やにぎわいを失った東京の町人たちのための開墾地とされたくらいであったから、地域の人びとにとって馬に荷物を積んで運搬する仕事は、貴重な収入源となっていたに違いない。幕末から街道での車両の利用が認められ、明治に入るとまずは人力車、続いて荷車や荷馬車が広く用いられるようになった。そのため、道路が平坦で幅が広いことが求められ、また痛みやすくなった路面の補修も大仕事になった。このため、国道として整備が進んだ水戸街道の利用がふえた。

通信・郵便の導入を調べてみよう

通信の分野では、1872(明治 5)年に郵便制度が適用され、松戸、流山、小金^{こがね}、我孫子^{すじ}に郵便取扱所が設けられた。街道筋^{すじ}では、従来から飛脚^{ひまぐく}の便があったが、安価^{あんか}で広く民衆が利用できる通信制度はこの時に始まる。

1877(明治 10)年には、利根川に汽船^{しゅうこう}が就航して人びとを驚かせたが、1890(明治 23)年にはオランダ人技術者の指導を受けた民間会社により、利根川と江戸川を結ぶ利根運河が竣工^{とねうんが しゅんこう}し、陸路での接続なしに、利根川と江戸川が結ばれるようになった。有料であったが年 3 万隻^{せき}以上の舟が利用し、1895(明治 28)年には汽船による銚子・東京間の定期航路も開かれた。このころにこの地域でも電信の取扱いが始まるが、郵便と異なり高価であったため、その利用は商取引や行政上の連絡などに限られた。

松戸では 1910(明治 43)年には、郵便局に公衆電話がおかれ、翌年には電話交換業務が始まったが、当時の町内の加入者は 39 名で、利用範囲は当時の電信以上に限定されていた。この年には江戸川にはじめて橋、木製の葛飾橋^{かつしかばし}が架けられ、また町内に電灯^{でんとう}が灯^{とも}った。松戸の人びとは物理的にも、文化的にも東京が近くなった印象を受けたに違いない。しかし、村落への普及には時差があり、昭和初年にかけて農村部^{むらやくば}へも電灯が普及していったものの、電話が通じていない村役場も多かった。

通信・郵便の導入を調べてみよう

通信の分野では、1872(明治 5)年に郵便制度が適用され、松戸、流山、小金^{こがね あび こ}、我孫子^{あんか}に郵便取扱所が設けられた。街道筋^{すじ}では、従来から飛脚^{ひきやく}の便があったが、安価で広く民衆が利用できる通信制度はこの時に始まる。

1877(明治 10)年には、利根川に汽船^{しゅうこう}が就航して人びとを驚かせたが、1890(明治 23)年にはオランダ人技術者の指導を受けた民間会社により、利根川と江戸川を結ぶ利根運河が竣工^{とねうんが しゅんこう}し、陸路での接続なしに、利根川と江戸川が結ばれるようになった。有料であったが年 3 万隻^{せき}以上の舟が利用し、1895(明治 28)年には汽船による銚子・東京間の定期航路も開かれた。このころに、この地域でも電信の取扱いが始まるが、郵便と異なり高価であったため、その利用は商取引や行政上の連絡などに限られた。

松戸では 1910(明治 43)年には、郵便局に公衆電話がおかれ、翌年には電話交換業務が始まったが、当時の町内の加入者は 39 名で、利用範囲は当時の電信以上に限定されていた。この年には江戸川にはじめて橋、木製の葛飾橋^{かつしかばし}が架けられ、また町内に電灯^{でんとう}が灯^{とも}った。松戸の人びとは物理的にも、文化的にも東京が近くなった印象を受けたに違いない。しかし、村落への普及には時差があり、昭和初年にかけて農村部^{むらやくば}へも電灯が普及していったものの、電話が通じていない村役場も多かった。

鉄道の開通はいつ頃か調べてみよう

1896(明治 29)年の暮には、不安定な海運にたよっていた常磐炭田^{じょうばんたん}の石炭輸送をめざす日本鉄道株式会社^{じょうばん}常磐線が開業する。地元の要望が強かった柏のほか、^{とり}取手、我孫子、松戸に駅が設けられ、水運と連携した輸送もおこなわれた。この鉄道のため、江戸川と利根川に橋が架けられた。当時、道路に橋はなく、待ち時間も必要な渡し舟^{ぶね}にたよっており、汽船は水路の迂回^{うかい}して東京から一晩^{ひとばん}を要したので、鉄道により30分程度で東京へ出られるようになったのは驚くべき変化であった。

鉄道の発達により、長距離輸送も舟運から鉄道輸送へ変化が進んだが、地域内でも1911(明治 44)年には野田^{のだ}の醤油醸造^{しょうゆじょうぞう}業者の原材料や製品の輸送の要求にこたえて、柏・野田間に千葉県営軽便鉄道野田線が開通し、1916(大正 5)年には流山軽便鉄道株式会社が流山と常磐線の馬橋間で小形の蒸気機関車^{じょうき}を利用する軽便鉄道営業を開始するなど、鉄道輸送が中心となり、水運の便が良い地域でも、鉄道網への接続が求められるようになった。

トラックの登場

大正末年になると新たに登場した自動車の通行や関東大震災^{きょうくんとん}の教訓から、葛飾橋のコンクリート橋台の鉄橋^{てつきょう}への架け替えがめざされ、1927(昭和 2)年に完成した。取手～我孫子間の利根川に大利根橋が架けられたのは、1930(昭和 5)年9月の

鉄道の開通はいつ頃か調べてみよう

1896(明治 29)年の暮には、不安定な海運にたよっていた常磐炭田^{じょうばんたんでん}の石炭輸送をめざす日本鉄道株式会社常磐線^{じょうばん}が開業する。地元の要望が強かった柏^{かし}のほか、取手、我孫子、松戸に駅が設けられ、水運と連携^{れんけい}した輸送もおこなわれた。この鉄道のため、江戸川と利根川に橋が架けられた。当時、道路に橋はなく、待ち時間も必要な渡し舟^{わたりふね}にたよっており、汽船は水路の関係で迂回して東京から一晚を要したので、鉄道により 30 分程度で東京へ出られるようになったのは驚くべき変化であった。

鉄道の発達により、長距離輸送も舟運^{しゅううん}から鉄道輸送へ変化が進んだが、地域内でも 1911(明治 44)年には野田の醤油醸造業者^{の だ しょうゆ じょうぞう}の原材料や製品の輸送の要求にこたえて、柏・野田間に千葉県営軽便鉄道野田線^{けいべん の だ}が開通し、1916(大正 5)年には流山軽便鉄道株式会社が流山と常磐線の馬橋間で小形の蒸気機関車^{しょうき}を利用する軽便鉄道営業を開始するなど、鉄道輸送が中心となり、水運の便が良い地域でも、鉄道網への接続が求められるようになった。

トラックの登場

大正末年になると新たに登場した自動車の通行や関東大震災^{きょうくん}の教訓から、葛飾橋のコンクリート橋台の鉄橋^{てつきょう}への架け替えがめざされ、1927(昭和 2)年に完成した。取手～我孫子間の利根川に大利根橋^{おおとね}が架けられたのは、1930(昭和 5)年 9 月の

ことで、これによってはじめて国道 6 号線は自動車での通行が可能になり、トラックによる貨物輸送が増えて併行する鉄道の貨物輸送量は減少しはじめた。しかし、大根橋開通直後におこなわれた調査では、一日の通行自動車 178 台(うちトラック 107 台)に対して、自転車^{べいこう}が 1605 台、歩行者 2334 名と圧倒的に多い。大正期に普及が著しく荷車を上回って最多の車両となった自転車は、荷物の運搬にも用いられており、現在の軽トラックのような役割を果たしていたともいえる。

都市化の進行を考えてみよう

鉄道による東京との接続により、明治末年からは東京市場向けの野菜の生産が活発になった。大正期には地域の子供が鉄道を利用して東京の専門学校へ通学するようになり、ついで関東大震災を契機として東京から移住して東京へ通勤する人びとが出て、郊外住宅地としての発展が期待されるようになってきた。しかし、常磐線は大正末年に日に 17 本しか運転されていなかったため、その混雑は激しく、電化とそれによる運転回数の増加を求める運動が開始された。その結果、1936(昭和 11)年に松戸まで電化され、運転本数が増加するとともに所要時間が松戸から上野までは 23 分に短縮された。松戸以北にもガソリン動車を利用して運転本数をふやし、通勤目的の居住者の増加に対応した。

ことで、これによってはじめて国道 6 号線は自動車での通行が可能になり、トラックによる貨物輸送が増えて併行する鉄道の貨物輸送量は減少しはじめた。しかし、大利根橋開通直後におこなわれた調査では、一日の通行自動車 178 台(うちトラック 107 台)に対して、自転車^{へいこう}が 1605 台、歩行者 2334 名と圧倒的に多い。大正期に普及が著しく荷車を上回って最多の車両となった自転車は、荷物の運搬にも用いられており、現在の軽トラックのような役割を果たしていたともいえる。

都市化の進行を考えてみよう

鉄道による東京との接続により、明治末年からは東京市場向けの野菜の生産が活発になった。大正期には地域の子弟が鉄道を利用して東京の専門学校へ通学するようになり、ついで関東大震災を契機として東京から移住して東京へ通勤する人びとが出て、郊外住宅地としての発展が期待されるようになってきた。しかし、常磐線は大正末年に日に 17 本しか運転されていなかったため、その混雑は激しく、電化とそれによる運転回数の増加を求める運動が開始された。その結果、1936(昭和 11)年に松戸まで電化され、運転本数が増加するとともに所要時間が松戸から上野までは 23 分に短縮された。松戸以北にもガソリン動車を利用して運転本数をふやし、通勤目的の居住者の増加に対応した。

トラックの普及には、農村不況に対応した失業対策土木事業としてなされた道路改修が貢献した部分も多く、国道は太平洋戦争直前には舗装された。しかし、1938(昭和 13)年以降はガソリンが統制されたため民間トラックの利用は減少し、これにかわって鉄道を利用した野菜の行商人が増加した。また、明治末年から利用が減少し続けていた利根運河は 1941(昭和 16)年の台風による水害を契機に航路としての営業を廃止することとなった。

東京の近郊都市としてどのように発展したか考えよう

戦後は、一時石炭不足で鉄道の運行本数が減らされていたが、地元では戦前に引き続き電化を求める運動が繰り広げられ、1949(昭和 24)年 6 月には取手までの常磐線が電化され、その後も新駅の開業や複々線化、また営団地下鉄との相互乗り入れなどによって通勤・通学の便は向上しつづけ、郊外住宅地としての開発が進んでいった。この結果、元来東京を迂回する貨物線として構想された武蔵野線も、通勤・通学手段として活用される事になった。

一方、道路では 1950 年代(昭和 30 年代後半)に新国道 6 号線の整備・舗装が進み、1965(昭和 40)年の調査では朝 7 時から夜 7 時までの間に 3 万台以上の自動車が大利根橋を通行したのに対し、自転車は 539 台、歩行者は 184 人にとどまり、自動車

トラックの普及には、農村不況に対応した失業対策土木事業としてなされた道路改修が貢献した部分も多く、国道は太平洋戦争直前には舗装された。しかし、1938(昭和 13)年以降はガソリンが統制されたため民間トラックの利用は減少し、これにかわって鉄道を利用した野菜の行商人が増加した。また、明治末年から利用が減少し続けていた利根運河は 1941(昭和 16)年の台風による水害を契機に航路としての営業を廃止することとなった。

東京の近郊都市としてどのように発展したか考えよう

戦後は、一時石炭不足で鉄道の運行本数が減らされていたが、地元では戦前に引き続いて電化を求める運動が繰り広げられ、1949(昭和 24)年 6 月には取手までの常磐線が電化され、その後も新駅の開業や複々線化、また営団地下鉄との相互乗り入れなどによって通勤・通学の便は向上しつづけ、郊外住宅地としての開発が進んでいった。この結果、元来東京を迂回する貨物線として構想された武蔵野線も、通勤・通学手段として活用される事になった。

一方、道路では 1950 年代(昭和 30 年代後半)に新国道 6 号線の整備・舗装が進み、1965(昭和 40)年の調査では朝 7 時から夜 7 時までの間に 3 万台以上の自動車が大利根橋を通行したのに対し、自転車は 539 台、歩行者は 184 人とどまり、自動車

の道としての性格がはっきりしている。また従来の東京からの放射状^{ほうしや}の国道整備に
対して、地方の都市を結ぶ国道網の形成がめざされ、1957(昭和 32)年 12 月に着工
された国道 16 号(2 級国道東京環状^{かんじょう}線)は 1970(昭和 45)年 4 月 4 日、野田～千葉間
が全通した。さらに全国的に長距離輸送のための高速道路網整備が進むなか、常磐
自動車道が建設され、1985(昭和 60)年には首都高速道路と接続された。自動車道
路の整備を背景に、商業・住宅地化が進む東京からの移転工場を含む内陸工業団地
も形成された。

交通の変化を調べよう

明治維新から現代にいたるまで、交通の発展はそれぞれの地域の様相を一変させて
いった。地域における交通の発達を調べることは、その地域の歴史的発展をさぐ
るよい材料となろう。

戦前における交通の発達は「県史」「市町村史」のほか、その地域の鉄道のこと
を書いた本が刊行されていることが多いので調べることは比較的容易である。また、
戦前の地図と現在の地図を比較すると地域の変容がわかる。多くの市町村では、鉄
道の開通や駅の開業、駅前の街並の変化、道路の整備、港湾の修築などの写真を集

修 正 文

の道としての性格がはっきりしている。また従来の東京からの放射状^{ほうしゃ}の国道整備に対して、地方の都市を結ぶ国道網の形成がめざされ、1957(昭和 32)年 12 月に着工された国道 16 号(2 級国道東京環状^{かんじょう}線)は 1970(昭和 45)年 4 月 4 日、野田～千葉間が全通した。さらに全国的に長距離輸送のための高速道路網整備が進むなか、常磐自動車道が建設され、1985(昭和 60)年には首都高速道路と接続された。自動車道路の整備を背景に、商業・住宅地化が進む東京からの移転工場を含む内陸工業団地も形成された。

削除

めた写真集を刊行しているので、交通の発達と地域の変化がどのようにかかわっているのかを視覚的にイメージすることもできよう。私鉄については「社史」が編集されていることも多い。

さまざまな統計によって駅の乗降客の推移や貨物の発送・到着の量と種類を調べると、それぞれの地域の性格やその変化がわかる。また、駅や新道路の開業、開通、あるいは計画が進められた時期の新聞をみると、当時の人びとが地域をどうとらえ、どのように変えていこうとしたかを知ることができる。

交通の変化を調べることで自分自身の住んでいる地域を考える一つの視点をつくるのできるのである。

修 正 文

歴史と生活 現代に残る風習と民間信仰を考えてみよう

現在の私たちが何気なく使っている言葉や、何となく従っている習慣などがある。そうした言葉や習慣などは、過去から現在へと長い時間をかけ、少しずつ形を変えながら受け継がれて特色ある生活文化を形成してきた。ここでは、民俗学の視点から、さまざまな風習や民間信仰が本来もっていた意味をさぐり、それらが時代や社会の変化の中でどのように推移したのかを考えてみよう。

歴史と民俗学とは何だろうか

歴史を学ぶということは、人びとの過去の経験やそこにこめられた知恵^{ちえ}に学ぶということだが、そのためにはまず過去に人びとがどんな経験をしてきたかを知らなければならない。その手がかりには、過去に人びとが使ったものや文字で書き残したものなどとともに、過去のどこかの時点で始まった人びとの経験がひそんでいる。文字で書かれたものを手がかりとするせまい意味での歴史学(文献史学)^{ぶんげんし がく}、遺跡や遺物を扱う考古学^{こうこがく}とならんで、現代に残る風習や民間信仰^{みんかんしんこう}などを探る民俗学^{みんぞくがく}は、そうした歴史研究のもう一つのアプローチなのである。

歴史と生活 現代に残る風習と民間信仰を考えてみよう

現在の私たちが何気なく使っている言葉や、何となく従っている習慣などがある。そうした言葉や習慣などは、過去から現在へと長い時間をかけ、少しずつ形を変えながら受け継がれて特色ある生活文化を形成してきた。ここでは、民俗学の視点から、さまざまな風習や民間信仰が本来もっていた意味をさぐり、それらが時代や社会の変化の中でどのように推移したのかを考えてみよう。

歴史と民俗学とは何だろうか

歴史を学ぶということは、人びとの過去の経験やそこにこめられた知恵^{ちえ}に学ぶということだが、そのためにはまず過去に人びとがどんな経験をしてきたかを知らなければならない。その手がかりには、過去に人びとが使ったものや文字で書き残したものなどとともに、過去のどこかの時点で始まった人びとの経験がひそんでいる。文字で書かれたものを手がかりとする意味での歴史学(文献史学^{ぶんげんしがく})、遺跡や遺物を扱う考古学^{こうこがく}とならんで、現代に残る風習や民間信仰^{みんかんしんこう}などを探る民俗学^{みんぞくがく}は、そうした歴史研究のもう一つのアプローチなのである。

日本の民俗学を考えよう

江戸時代も中ごろには、日本各地に古代から続くと思われる一見^{いっけん}奇妙^{きみょう}な風習^{ふうしゅう}があることに気づいた有識者^{ゆうしきしゃ}がおり、国学^{こくがく}の大成者^{たいせいしゃ}として知られる本居宣長^{もとおりのりなが}もそれらの風習に注目した一人だった。ほぼ同じころ、ヨーロッパでもそうした古代の遺習を調べ、相互に比較してそれらが同じ系統のものかどうかなどを研究^{けんきゅう}する学問^{がくもん}が生まれ、イギリスではこの学問を「フォークロア」と呼んでいる。柳田国男^{やなぎたくに}はそれを「民俗学」と名付け、1913(大正2)年には研究誌『郷土研究^{きょうど}』を創刊したが、これには折口信夫^{おりぐちしのぶ}や南方熊楠^{みなみかたくなぐす}らも参加し、彼らはそれぞれ独自の方法で研究を進めていった。

ハレとケ

柳田国男は衣食住の研究に力を入れたが、そこでの発見の一つに「ハレ(晴)」と「ケ(褻)」の問題があった。正月や入学式・成人式・結婚式などでは、普段着よりも上等な衣服を身に着けるが、これは「晴れ着」と呼ばれている。柳田は、「晴れ着」が元は「晴衣」とも書き、中世にまでさかのぼる古くからの言葉であること、また九州には普段着のことを「褻衣」と呼ぶ地方があることから、日本人の時間や空間の意識には、特別な儀礼を行う「ハレ」と日常の「ケ」の区別があることに気付いたのである。

日本の民俗学を考えよう

江戸時代も中ごろには、日本各地に古代から続くと思われる一見奇妙な風習があることに気づいた有識者^{ゆうしきしゃ}がおり、国学の大成者^{こくがくたいせいしや}として知られる本居宣長^{いっけんきみょう}もそれらの風習に注目した一人だった。ほぼ同じころ、ヨーロッパでもそうした古代の遺習を調べ、相互に比較してそれらが同じ系統のものかどうかなどを研究する学問が生まれ、イギリスではこの学問を「フォークロア」と呼んでいる。柳田国男^{やなぎたくにお}はそれを「民俗学」と名付け、1913(大正2)年には研究誌『郷土研究』^{きょうど}を創刊したが、これには折口信夫^{おりぐちしのぶ}や南方熊楠^{みなみかたくなぐす}らも参加し、彼らはそれぞれ独自の方法で研究を進めていった。

ハレとケ

柳田国男は衣食住の研究に力を入れたが、そこでの発見の一つに「ハレ(晴)」と「ケ(褻)」の問題があった。正月や入学式・成人式・結婚式などでは、普段着よりも上等な衣服を身に着けるが、これは「晴れ着」と呼ばれている。柳田は、「晴れ着」が元は「晴衣」とも書き、中世にまでさかのぼる古くからの言葉であること、また九州には普段着のことを「褻衣」と呼ぶ地方があることから、日本人の時間や空間の意識には、特別な儀礼を行う「ハレ」と日常の「ケ」の区別があることに気付いたのである。

こうした区別は、正月や祭礼、儀式などの際に特別の食事を用意することや、そうした時には「よそ行き」の言葉を使うことにも現われている。つまり、「ハレ」の時と場所では、それに相応しい衣食や言葉、行動などが求められ、日常である「ケ」のそれらとは区別されているのである。柳田は、こうした発見と同時に、「晴れ着」がしばらく使われると普段着にされていることにも注目し、明治以降の近代化のなかで、この「ハレ」と「ケ」の区別がしだいにうすれてきており、貴重な民俗資料の多くが失われつつあることに警鐘を鳴らしている。

一例として餅と先祖について考えてみよう

正月などの「ハレ」の行事の主役はいったい誰か。柳田国男のつぎの問いはそれだった。正月の「ハレ」の食事に欠かせないものは餅である。この餅には力の源になるという特別な意味があり、この力餅の習俗は、現在でも餅の入ったうどんを「力うどん」などと呼んで、伝わっている。正月の行事の古い姿をさぐっていくと、餅を神棚や床の間に飾り、そのお下がりを家族で食べるという形が多いが、柳田は餅を供えて祭っているのは「家の神」、つまり先祖だと考える。そして、正月の餅は先祖と共に食べる特別な食べ物であり、そうすることによって先祖から一年分の働く力を授けられるというのである。餅の供え方や飾り方、餅の形や雑煮の作り方、食べ方などから、その意味をさぐることもできる。正月以外の行事や儀礼の多くも先祖を祭っており、そこから柳田は、先祖を祭ることが日本人の民間信仰の核心だと考えるようになっていったのである。

こうした区別は、正月や祭礼、儀式などの際に特別の食事を用意することや、そうした時には「よそ行き」の言葉を使うことにも現われている。つまり、「ハレ」の時と場所では、それに相応しい衣食や言葉、行動などが求められ、日常である「ケ」のそれらとは区別されているのである。柳田は、こうした発見と同時に、「晴れ着」がしばらく使われると普段着にされていることにも注目し、明治以降の近代化のなかで、この「ハレ」と「ケ」の区別がしだいにうすれてきており、貴重な民俗資料の多くが失われつつあることに警鐘を鳴らしている。

一例として餅と先祖について考えてみよう

正月などの「ハレ」の行事の主役はいったい誰か。柳田国男のつぎの問いはそれだった。正月の「ハレ」の食事に欠かせないものは餅である。この餅には力の源になるという特別な意味があり、この力餅の習俗は、現在でも餅の入ったうどんを「力うどん」などと呼んで、伝わっている。正月の行事の古い姿をさぐっていくと、餅を神棚や床の間に飾り、そのお下がり^さを家族で食べるという形が多いが、柳田は餅を供えて祭っているのは「家の神」、つまり先祖だと考える。そして、正月の餅は先祖と共に食べる特別な食べ物であり、そうすることによって先祖から一年分の働く力を授けられるというのである。餅の供え方や飾り方、餅の形や雑煮^{ぞうに}の作り方、食べ方などから、その意味をさぐることもできる。正月以外の行事や儀礼の多くも先祖を祭っており、そこから柳田は、先祖を祭ることが日本人の民間信仰の核心だと考えるようになっていったのである。

来訪する神とは何だろう

しかし、日本人が民間信仰で祭る神のなかには、どうも先祖とは考えにくいものもある。正月の初詣^{はつもう}では、現在では合格祈願のため「学問の神様」とされる菅原道真^{すががん}を祭った天神社^{てんじんしゃ}に詣^{もう}でる場合も見受けられるが、古来はまず「家の神」、ついで「村の神」^{むら}を祭る鎮守社^{ちんじゅしゃ}に詣でるとというのが一般的だった。しかし、江戸時代の都市では「七福神めぐり」^{しちふくじん}の風習も盛んとなり、この七福神が乗り、宝物^{たからもの}を満載した宝船^{まんさい}の絵を飾^{はつゆめ}って良い初夢をみようとする^{まっ}ことも行われ、これらの風習は現在も続いている。自分の地域の七福神の由来やそれを祀っている寺社の歴史を調べることで、地域で流行した信仰を考えることもできる。七福神のなかでもとくに人気の高いのは「エビス神」で、漢字で書くときは「戎」、「夷」、「恵比須(寿)」などの文字が用いられている。その漢字からも明らかなように、「エビス神」は異国から来た神で、しかも福をもたらずと信じられている。日本人が祭る神にはこのような来訪する神^{らいほう}が少なからずあり、折口信夫はこれを「まれびと」と名付け、海の彼方^{かなた}にある「常世^{とこよ}」の国から、年に一度か、せいぜい数度だけ訪れる神だとした。「エビス神」の信仰は、江戸時代に都市から農村へと広がり、ついには「家の神」、それも決して外出しないで留守番をする神として祭られるようにさえなっていたのである。

来訪する神とは何だろう

しかし、日本人が民間信仰で祭る神のなかには、どうも先祖とは考えにくいものもある。正月の初詣^{はつもう}では、現在では合格祈願^{きがん}のため「学問の神様」とされる菅原道真^{すがはらのみちざね}を祭った天神社^{てんじんしゃ}に詣^{もつ}でる場合も見受けられるが、古来はまず「家の神」、ついで「村の神」を祭る鎮守社^{ちんじゅしゃ}に詣^{もつ}でるとというのが一般的だった。しかし、江戸時代の都市では「七福神めぐり」の風習も盛んとなり、この七福神が乗り、宝物^{たからもの}を満載した宝船^{たからぶね}の絵を飾^{はつゆめ}って良い初夢をみようとする^{まつ}ことも行われ、これらの風習は現在も続いている。自分の地域の七福神の由来やそれを祀っている寺社の歴史を調べることで、地域で流行した信仰を考えることもできる。七福神のなかでもとくに人気の高いのは「エビス神」で、漢字で書くときは「戎」,^{えびす}「夷」,^{えい}「恵比須(寿)」などの文字が用いられている。その漢字からも明らかなように、「エビス神」は異国から来た神で、しかも福をもたらすと信じられている。日本人が祭る神にはこのような来訪する神^{らいほう}が少なからずあり、折口信夫はこれを「まれびと」と名付け、海の彼方^{かなた}にある「常世^{とこよ}」の国から、年に一度か、せいぜい数度だけ訪れる神だとした。「エビス神」の信仰は、江戸時代に都市から農村へと広がり、ついには「家の神」、それも決して外出しないで留守番をする神として祭られるようにさえなっていたのである。

節分の鬼を調べてみよう

折口信夫のいう「まればと」の一つに「春来る鬼」がいる。「オニ」は、「隠」、つまり隠れているものという言葉に由来し、これに漢字の「鬼」が当てられたものと考えられている。折口は、節分の夜に「福は内、鬼は外」と豆をまかれて追い払われる「オニ」は、山の精霊が「まればと」となって来訪した「春来る鬼」だとする。現在、この豆まきは節分、つまり旧暦の立春の前夜に行われているが、元来は大晦日の行事だった。大晦日には、その年の悪しきものを「鬼は外」という形で追い払ったわけだが、立春が何日と固定されていない旧暦ではそれが大晦日になる可能性が約5割もあったとされるので、追い払われるのが「春来る鬼」になっても不思議はなかったのである。各地に残る節分の行事や大晦日の行事についても調べよう。

旧暦の行事にはどんなものがあるだろうか

旧暦は、月の運行を基準にして一年の暦を定めた太陰暦で、1872(明治5)年12月2日まで使われていたが、明治新政府により太陽の運行を基準とする太陽暦が採用され、翌日が1873(明治6)年1月1日となったのである。しかし、旧暦のもと

節分の鬼を調べてみよう

折口信夫のいう「まれびと」の一つに「春来る鬼^{はるく おに}」がいる。「オニ」は、「隠^{ゆらい}」、つまり隠れているものという言葉に由来し、これに漢字の「鬼」が当てられたものと考えられている。折口は、節分の夜に「福は内^{せつぶん}、鬼は外^{うち}」と豆をまかれて追い払われる「オニ」は、山の精霊^{せいれい}が「まれびと」となって来訪した「春来る鬼」だとする。現在、この豆まきは節分、つまり旧暦^{きゅうれき}の立春^{りっしゅん}の前夜に行われているが、元来は^{おおみそか}大晦日の行事だった。大晦日には、その年の悪しきものを「鬼は外」という形で追い払ったわけだが、立春が何日と固定されていない旧暦ではそれが大晦日になる可能性が約5割もあったとされるので、追い払われるのが「春来る鬼」になっても不思議はなかったのである。各地に残る節分の行事や大晦日の行事についても調べよう。

旧暦の行事にはどんなものがあるだろうか

旧暦は、月の運行^{うんこう}を基準にして一年の暦^{こよみ}を定めた太陰暦^{たいいんれき}で、1872(明治5)年12月2日まで使われていたが、明治新政府により太陽の運行を基準とする太陽暦^{たいようれき}が採用され、翌日が1873(明治6)年1月1日となったのである。しかし、旧暦のもと

での行事や風習にはいぜんとして根強く続いているものも少なくない。1年を3カ月ごとに春夏秋冬の四季に分ける旧暦では正月から春となるが、年賀状の挨拶文には「新春」や「初春」などの言葉を用いるのが現在でも一般的である。また、毎月の第1日を「ついたち」と呼ぶが、これは新月のほんのわずかに月が出た状態、つまり「月立ち」から転じた言葉と考えられている。旧暦では、三日月を経て、月がしだいに丸みを帯び、満月の十五夜を迎え、今度はしだいに欠けて晦日、つまり30日に至るのである。月の運行にしたがって、3・13・15・16・23・26日には、月の出を待つて供え物をして月を祭る「月待ち」の行事があり、月の後半は月の出が遅いので徹夜の行事になった。月の運行は女性の生理と関係しているため、「月待ち」の行事の中心は女性で、妊娠や子育てなどが話し合われたという。

現代の民俗を調べてみよう

現在、「月待ち」の行事はほとんど姿を消してしまっている。私たちの周囲にはさまざまな風習や民間信仰が、気が付かないところでまだまだ息づいていることがわかる。また、クリスマスやバレンタインデーなどの新しい風習も日々生まれつつある。

この主題学習を手がかりとして、自分の地域でおこなわれている正月の供え物や飾り物の由来やその材料を調べ、正月の食事の作法がどのような意味をもっているのかをさぐってみよう。また、初詣や節分などの年中行事をも考察することで、古

での行事や風習にはいぜんとして根強く続いているものも少なくない。1 年を3カ月ごとに春夏秋冬の四季に分ける旧暦では正月から春となるが、年賀状の挨拶文には「新春」や「初春」などの言葉を用いるのが現在でも一般的である。また、毎月の第1日を「ついたち」と呼ぶが、これは新月のほんのわずかに月が出た状態、つまり「月立ち」から転じた言葉と考えられている。旧暦では、三日月を経て、月がしだいに丸みを帯び、満月の十五夜を迎え、今度はしだいに欠けて晦日、つまり30日に至るのである。月の運行にしたがって、3・13・15・16・23・26日には、月の出を待って供え物をして月を祭る「月待ち」の行事があり、月の後半は月の出が遅いので徹夜の行事になった。月の運行は女性の生理と関係しているため、「月待ち」の行事の中心は女性で、妊娠や子育てなどが話し合われたという。

現代に残る民俗や風習・民間信仰を調べてみよう

現在、「月待ち」の行事はほとんど姿を消してしまっている。しかし、この主題学習を手がかりとして、自分の地域でおこなわれている正月の供え物や飾り物の由来やその材料を調べたり、正月の食事の作法がどのような意味をもっているのかを探ってみよう。また、初詣や節分などの年中行事をも考察することで、古来からの神々と私たちとの接点を考えることができよう。

風習や民間信仰を調べる素材としては、正月行事・七草・節分・雛祭り・端午の節句・七夕・お盆・十五夜・大晦日などの年中行事、成人の日・春分の日・秋分の

原

文

来からの神々と私たちとの接点を考えることができよう。地域の人びとからさまざまなことを聞き取り，祖父母や家族の話に耳を傾け，そして何よりも自分自身の生活に観察の目を向けよう。今日に生きている「歴史」を自分の手で探ってみてはどうだろうか。

日・勤労感謝の日などの祝日，誕生・七五三・婚礼・葬礼などの通過儀礼，春祭り・夏祭り・秋祭りなどの祭礼など，いろいろとりあげることができる。

これらの年中行事・通過儀礼・祭礼などについて，次のように調査して自分の住んでいる地域の風習や民俗信仰に迫ってみてはどうだろうか。

- ①地元や学校の図書館で，地域の『市史』や『町村史』に入っている『民俗編』を読み，地域に伝わる年中行事・通過儀礼・祭礼にはどのようなものがあるか，あったかを調べる。
- ②図書館にある『日本民俗大辞典』や『日本民俗事典』などを調べ，日本各地にある同じような風習の内容や相異点を考える。
- ③自分の地域の年中行事や祭礼のカレンダーをつくり，現在でも引き続いておこなわれているもの，現在ではあまりおこなわれなくなったものを調査する。
- ④祭礼や年中行事がおこなわれなくなった理由を地域の人びとへのアンケートや聞き取りを実施し，住民の意識変化，時代の変化，生活様式の変化とのかかわりを調べる。

このように地域の人びとからさまざまなことを聞き取り，祖父母や家族の話に耳を傾け，そして何よりも自分自身の生活に観察の目を向け，今日に生きている「歴史」を自分の手で探ってみてはどうであろうか。

原文

歴史と生活 産業・技術の変化—世界経済の中の日本の工業化を考えてみよう

この百年余りの間に、それまで農業を主たる産業としていた日本は、急速な工業化を遂げ、国土のありさまや人々との暮らしぶりもめまぐるしく変貌した。ここでは、近現代における国際的な産業・技術の発展の中で、日本の産業・技術がどのような影響を受けたのかを世界経済の視点から考察し、日本の産業構造や社会をどう変化させたのかを考える手がかりとしよう。

歴史と生活 産業・技術の変化―世界経済の中の日本の工業化を考えてみよう

この百年余りの間に、それまで農業を主たる産業としていた日本は、急速な工業化を遂げ、国土のありさまや人びとの暮らしぶりもめまぐるしく変貌した。ここでは、近現代における国際的な産業・技術の発展の中で、日本の産業・技術がどのような影響を受けたのかを世界経済の視点から考察し、日本の産業構造や社会をどう変化させたのかを考える手がかりとしよう。

産業・技術の発達と生活について調べる方法

各地には特色ある産業に関する博物館・資料館があり、また特別展なども企画しているので利用しよう。民間の企業のなかにも、最新の製品と古い技術でつくられた製品を、比較・展示している博物館や資料室を設置しているところも多いので、ぜひ訪ねてみよう。そこでは、訪れた人が実物を間近に見たり、機械を操作したりして体験できるようになってきた。ピアノや自動車、時計、自転車などのほか、カバンなどのユニークな資料館もできているので、身近な生活用品についても調べることができる。こうした博物館や資料館で、製品や技術の差異に目を向け、産業・技術の発展の足跡そくせきを体験してみよう。このような施設を利用することで、産業・技術への興味関心を深めることができる。

イギリスの産業革命はどのような特徴があるのか

世界最初の本格的な工業化は、18 世紀末のイギリスで木綿工場から始まった。
綿紡績・綿織物用の作業機械の発明・改良があいつぎ、これらにワットが改良した
蒸気機関が動力源として組み合わされ、均質で安価な綿糸・綿布が大量に生産さ
れるようになった。技術革新は、機械工業・製鉄業・石炭業などに連鎖的に広がっ
た。

工場や鉱山では、子供・女性をふくむ多数の労働者が、苛酷な労働条件のもとで、
長時間の低賃金労働に従事した。また、農業中心で自給自足をたてまえとした従
来の経済は、工業製品をはじめとする一般の商品はもとより、人間の労働力や土地
まで万物に価格をつけて売買する「市場経済」へと急速に変貌した。こうした一
連の経済的・社会的な大転換を、産業革命と呼ぶ。

そのほか、身近にある工場施設を見学したり技術者への聞き取り調査を行なう場合は、十分に下調べをおこない、あらかじめ質問事項をはっきりさせておくことが大切である。それぞれの工業製品のデザインや組みこまれている機能の違いを調べることで、世界の国々の生活意識や社会構造の違いを考えることもできる。産業・技術に着目することで、近現代の日本の変化を考え、将来にわたる日本の産業立国の道を展望してみよう。

イギリスの産業革命はどのような特徴があるのか

ではまず世界の産業革命を調べるには、学校や地元の図書館にいて、世界の歴史関係の本を件名目録やコンピューター検索で探すとよい。司書の方も気軽に相談にのってくれる。

世界最初の本格的な工業化は、18世紀末のイギリスで綿紡績業から始まった。綿紡績・綿織物用の作業機械の発明・改良があいつぎ、これらにワットが改良した蒸気機関が動力源として組み合わせられ、均質で安価な綿糸・綿布が大量に生産されるようになった。技術革新は、機械工業・製鉄業・石炭業などに連鎖的に広がった。

工場や鉱山では、子供・女性をふくむ多数の労働者が、苛酷な労働条件のもとで、長時間の低賃金労働に従事した。また、農業中心で自給自足をたてまえた従来の経済は、工業製品をはじめとする一般の商品はもとより、人間の労働力や土地まで万物に価格をつけて売買する「市場経済」へと急速に変貌した。こうした一連の経済的・社会的な大転換を、産業革命と呼ぶ。

キャプション

ミューレ紡績機を使用した工場。細くて強い糸がつむげるので、ミューレ機は

イギリスは 19 世紀前半には、鉄道・蒸気船の実用化もあって、全世界に工業製品を輸出する「世界の工場」の地位を確立した。しかし、工業化の波はフランス・ドイツ・アメリカ・ロシア・日本などに及び、19 世紀末までにはこれらの諸国も産業革命を達成した。

後発国日本の工業化は、どのようにおこなわれたか

日本は 19 世紀半ばの黒船来航の衝撃のもとに、近代化への歩みを始めた。イギリスを始めとする先進工業国に、「追いつき追い越す」ことをめざした日本の立場には、どのような強みと弱みがあったのだろうか。

日本の産業革命は、1880 年代に綿紡績業など繊維産業を中心に始まった。準戦時体制に移行する 1930 年代には、工業化の第二段階である重化学工業化が始まり、鉄鋼・軍需などの部門が急成長をとげた。この第二段階は、敗戦とそれに続く後退の時期をはさんで、自動車・電気機械産業が加わった高度経済成長期に全面的に展開した。さらに、第一次石油危機（1973 年）後になると、エレクトロニクスやバイオテクノロジーなどの先端技術（ハイテク）産業を軸とする工業化の第三段階が始まった。

ミュール紡績機を使用した工場。細くて強い糸がつむげるので、ミュール機は

イギリスは 19 世紀前半には、鉄道・蒸気船の実用化もあって、全世界に工業製品を輸出する「世界の工場」の地位を確立した。しかし、工業化の波はフランス・ドイツ・アメリカ・ロシア・日本などに及び、19 世紀末までにはこれらの諸国も産業革命を達成した。

後発国日本の工業化は、どのようにおこなわれたか

日本は 19 世紀半ばの黒船来航の衝撃のもとに、近代化への歩みを始めた。イギリスを始めとする先進工業国に、「追いつき追い越す」ことをめざした日本の立場には、どのような強みと弱みがあったのだろうか。

日本の産業革命は、1880 年代に綿紡績業など繊維産業を中心に始まった。準戦時体制に移行する 1930 年代には、工業化の第二段階である重化学工業化が始まり、鉄鋼・軍需などの部門が急成長をとげた。この第二段階は、敗戦とそれに続く後退の時期をはさんで、自動車・電気機械産業が加わった高度経済成長期に全面的に展開した。さらに、第一次石油危機（1973 年）後になると、エレクトロニクスやバイオテクノロジーなどの先端技術（ハイテク）産業を軸とする工業化の第三段階が始まった。

イギリスから約 100 年おくれて工業化が始まった後発国日本の経済発展に特有の現象とは何だったのであろう。第一に、繊維・鉄鋼・自動車・電気機械など花形産業が^{はながた}つぎつぎに交替し、それぞれが急速な発生・興隆・絶頂・衰退のサイクルを通過することに気づくであろう。すなわち、まず輸入が増大し、国産品が輸入品をしだいにおしのけ、ついで輸出が増大する。先進国の完成した技術を導入し、国内の安価な労働力を結びつけることで、短期間に大きな成功をおさめたのである。しかし、かつての花形産業の多くが、より後発の国の安い輸出品に押されたり、技術革新で代替品が出現したりして、衰退産業・斜陽産業となった。

第二に、明治政府は、近代工業の建設を民族独立の不可欠の条件とみて、「富国强兵・殖産興業」のスローガンのもと、鉄道・道路・通信など産業基盤の整備をはかり、軍工廠や八幡製鉄所など重工業部門をみずから設立・経営した。重化学工業化の段階でも、国家的な計画に基づく体系的な産業政策が実施された。特に高度成長期には、通産省の主導で、戦略産業の育成保護・国際競争力強化が国策として推進された。民間における自生的な経済発展がおこなわれたイギリスとは対照的な政府の役割について調べてみよう。

第三に、工業化開始後も^{せいし}ながら、^{ぼうせき}農業がなお国内の主要産業であり続けた。工業化初期の製糸業・綿紡績業などで働いたのは若い女性労働者たちで、その多くは農家からの出稼者であった。重い小作料の支払いにあえぐ貧しい農家の家計が、娘の工場での稼ぎで何とかおぎなわれるという形で、寄生地主制が支えられていた。しかし、1930 年代に重化学工業化が展開し始めると、しだいに成年男性が工業労働

イギリスから約 100 年おくれて工業化が始まった後発国日本の経済発展に特有の現象とは何だったのであろう。第一に、繊維・鉄鋼・自動車・電気機械など花形産業がつぎつぎに交替し、それぞれが急速な発生・興隆・絶頂・衰退のサイクルを通過することに気づくであろう。すなわち、まず輸入が増大し、国産品が輸入品をしだいにおしのけ、ついで輸出が増大する。先進国の完成した技術を導入し、国内の安価な労働力と結びつけることで、短期間に大きな成功をおさめたのである。しかし、かつての花形産業の多くが、より後発の国の安い輸出品に押されたり、技術革新で代替品が出現したりして、衰退産業・斜陽産業となった。

第二に、明治政府は、近代工業の建設を民族独立の不可欠の条件とみて、「富国強兵・殖産興業」のスローガンのもと、鉄道・道路・通信など産業基盤の整備をはかり、軍工廠や八幡製鉄所など重工業部門をみずから設立・経営した。重化学工業化の段階でも、国家的な計画に基づく体系的な産業政策が実施された。特に高度成長期には、通産省の主導で、戦略産業の育成保護・国際競争力強化が国策として推進された。

ここで、イギリスと日本との工業化について、対照的な変遷の違いがみられるのはなぜか、調べてみよう。特に明治政府が進めた産業を、食品、農・林業、紙と繊維、エネルギー、金属・工業などに分類し、それぞれの現在ある全国の産業博物館などにインターネットで検索して、情報を集めよう。

第三に、工業化開始後もながらく農業がなお国内の主要産業であり続けた。工業化初期の製糸業・綿紡績業などで働いたのは若い女性労働者たちで、その多くは農

働力の中心となり、さらに高度成長期には、若者たちを中心に農村から工業地帯の都市へと急激な人口移動が生じた。各時代における労働者の構成や人口の移動について、自分自身の地域も調べてみよう。

アメリカ産業文明はどのように出現したのか

20 世紀に入ると、イギリスは「世界の工場」の地位をアメリカに明けわたした。アメリカは、生産・流通・消費から大衆文化まで社会の全面にわたる、新しいスタイルの文明をつくり出したのである。それを可能にした技術革新と新しい経済政策について調べてみよう。

19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて、アメリカの技術者テーラーは、工場労働の「科学的管理法」（テーラー＝システム）を考案した。作業工程を細分化して、単純作業にしたがう多数の労働者の流れ作業に編成する。個々の作業の標準時間をはかって、労働者が 1 日に達成するべきノルマ（課業）を定め、達成した労働者には高率の出来高払い賃金を支払う。それは、生産性の上昇によって、企業利益の増加と労働賃金の上昇を両立させようとする試みであった。企業家のフォードは、これを自動車生産に応用した。1908 年に始まったフォード T 型車の生産に、流れ作業の間をベルトコンベアでつないで無数の部品をつぎつぎに組み立てていく「組み立てライン方式」を導入していった。1920 年代半ばには、草創期に 1 年かけて生産

家からの出稼でかせぎ者であった。重い小作料こさくりょうの支払いにあえぐ貧しい農家の家計が、娘の工場での稼かせぎで何とかおぎなわれるという形で、寄生地主制きせいじぬしが支えられていた。しかし、1930年代に重化学工業化が展開し始めると、しだいに成年男性が工業労働力の中心となり、さらに高度成長期には、若者たちを中心に農村から工業地帯の都市へと急激な人口移動が生じた。

こうした各時代における労働者の構成や人口の移動について、自分自身の地域についても統計をとりながら調べてレポートにしてみよう。そうすれば、自分の地域の特色も知ることができる。また明治・大正時代の日本の工業を調べるには、愛知県愛知郡長久手町のトヨタ博物館や、兵庫県尼崎市のユニチカ記念館などさまざまな企業博物館が便利である。展示や研究内容は、インターネットで検索できる。

アメリカ産業文明はどのように出現したのか

20世紀に入ると、イギリスは「世界の工場」の地位をアメリカに明けわたした。アメリカは、生産・流通・消費から大衆文化まで社会の全面にわたる、新しいスタイルの文明をつくり出したのである。それがなぜ可能になったのかを技術革新と新しい経済政策中心に具体例をあげて考えてみよう。

19世紀末から20世紀初頭にかけて、アメリカの技術者テーラーは、工場労働の「科学的管理法」(テーラー=システム)を考案した。作業工程こうあんを細分化さいぶんかして、単

していた台数を1日で生産できるようになった。また、この間に、T型車1台の価格は約3分の1に引き下げられた。規格化した工業製品の低コスト大量生産は、電気機械など他の多くの分野に普及し、こうした技術革新を基礎に、1920年代のアメリカにはかつてない経済繁栄が訪れた。

しかし、大量生産に見あうだけの大きな需要が社会になかったこともあって、1930年代のアメリカは、一転して激しい「大恐慌」の嵐にみまわれた。これに対し、イギリスの経済学者ケインズの理論に基づいて、公共投資・社会保障など政府の財政支出を拡大して社会のなかに十分な需要をつくり出そうとする「ニューディール政策」が実施された。また、労働組合の組織が進んで賃上げが強く要求され、労働者の賃金・生活水準は全般的に上昇した。こうして大量生産が大量消費へと連動するようになり、第二次大戦後には本格的な大衆消費社会が出現した。

純作業にしたがう多数の労働者の流れ作業に編成する。個々の作業の標準時間をはかって、労働者が1日に達成すべきノルマ（課業）を定め、達成した労働者には高率の出来高払い賃金を支払う。それは、生産性の上昇によって、企業利益の増加と労働賃金の上昇を両立させようとする試みであった。企業家のフォードは、これを自動車生産に応用した。1908年に始まったフォードT型車の生産に、流れ作業の間をベルトコンベアでつないで無数の部品をつぎつぎに組み立てていく「組み立てライン方式」を導入していった。1920年代半ばには、草創期に1年かけて生産していた台数を1日で生産できるようになった。また、この間に、T型車1台の価格は約3分の1に引き下げられた。規格化した工業製品の低コスト大量生産は、電気機械など他の多くの分野に普及し、こうした技術革新を基礎に、1920年代のアメリカにはかつてない経済繁栄が訪れた。

しかし、大量生産に見あうだけの大きな需要が社会になかったこともあって、1930年代のアメリカは、一転して激しい「大恐慌」の嵐にみまわれた。これに対し、イギリスの経済学者ケインズの理論に基づいて、公共投資・社会保障など政府の財政支出を拡大して社会のなかに十分な需要をつくり出そうとする「ニューディール政策」が実施された。また、労働組合の組織が進んで賃上げが強く要求され、労働者の賃金・生活水準は全般的に上昇した。こうして大量生産が大量消費へと連動するようになり、第二次世界大戦後には本格的な大衆消費社会が出現した。

日本自動車産業の興隆と「経済大国」日本の現状を考えよう

20 世紀後半、日本は世界史的にも類例のない高度経済成長（1955 ～ 73 年）を実現し、「経済大国」の地位を不動のものとした。国民の多くが貧困に悩んでいた日本が、「豊かさ」を謳歌する社会へと一変した。

戦後の日本では、アメリカ軍による占領期はもとより占領終結後も、経済・社会・文化の急激な「アメリカ化（アメリカナイズ）」が進んだ。高度成長期以降、大量生産・大量消費の経済システムが形成され、冷蔵庫やテレビなどの家庭電化製品・自家用車・スーパーマーケットなどに象徴される、豊かで華やかな「アメリカ的生活様式」がしだいに定着した。そして、後進的でゆがんだ経済構造に長く苦しんできた日本が、一転して、世界経済の中心をなす「経済大国」になった。それをもっともよく示すのは、日本自動車産業の興隆である。

陸軍の支援を受けてトラックの国産体制が成立したのは準戦時体制下の 1930 年代後半だが、自動車産業が日本の基幹産業となるのは、乗用車生産を核として急成長をとげた高度成長期以降である。乗用車生産は、輸入部品の組み立てという形で始まったが、1955 年に国産乗用車の開発が成功し、「組み立てライン方式」の導入による生産性向上も進み、国内需要の拡大に支えられて爆発的に生産が増大した。日本の自動車生産台数は 1955 年に約 7 万台だったが、1960 年に 48 万台、1970 年に 529 万台、1980 年には 1104 万台となって、ついにアメリカを追い抜いた。輸出

日本自動車産業の興隆と「経済大国」日本の現状を考えよう

20 世紀後半、日本は世界史的にも類例のない高度経済成長（1955 ～ 73 年）を実現し、「経済大国」の地位を不動のものとした。国民の多くが貧困に悩んでいた日本が、「豊かさ」を謳歌する社会へと一変した。

戦後の日本では、アメリカ軍による占領期はもとより占領終結後も、経済・社会・文化の急激な「アメリカ化（アメリカナイズ）」が進んだ。高度成長期以降、大量生産・大量消費の経済システムが形成され、冷蔵庫やテレビなどの家庭電化製品・自家用車・スーパーマーケットなどに象徴される、豊かで華やかな「アメリカ的生活様式」がしだいに定着した。君たちの父親や母親から当時のくらしの激変を聞いてみよう。そして、後進的でゆがんだ経済構造に長く苦しんできた日本が、一転して、世界経済の中心をなす「経済大国」になった。それをもっともよく示すのは、日本自動車産業の興隆である。

陸軍の支援を受けてトラックの国産体制が成立したのは準戦時体制下の 1930 年代後半だが、自動車産業が日本の基幹産業となるのは、乗用車生産を核として急成長をとげた高度成長期以降である。乗用車生産は、輸入部品の組み立てという形で始まったが、1955 年に国産乗用車の開発が成功し、「組み立てライン方式」の導入による生産性向上も進み、国内需要の拡大に支えられて爆発的に生産が増大した。日本の自動車生産台数は 1955 年に約 7 万台だったが、1960 年に 48 万台、1970 年

もアメリカ向けを中心に激増し、生産台数の半分以上を輸出するようになった。

同じ 1980 年、世界の GNP（国民総生産）総計に占める日本の比重は、約 10 % となった（アメリカと EC 諸国はそれぞれ約 20 %）。日本経済は巨大な規模に成長し、その国際的地位は飛躍的に高まった。しかし、加工貿易型の日本経済は輸出依存度が高く、ことに高度成長期以降の工業製品輸出は「集中豪雨的」とも表現されたように、相手国の産業に打撃を与え、失業を増大させた。欧米諸国は、高関税など貿易障壁をもうけたり、日本に輸出規制・輸入促進を求めるなど、激しい貿易摩擦が生じた。輸出を規制された日本の自動車産業は、ぞくぞくと欧米諸国に進出し、現地生産を開始した。こうした事情から、日本の自動車生産・輸出は、1980 年代後半から頭打ち傾向となった。生産台数は、1990 年に 1349 万台とピークに達したのち減少に転じ、1994 年には 14 年ぶりに世界第 1 位の座をあけわたした。1970 年代から 80 年代にかけての新聞や雑誌で、貿易摩擦の実態、日本政府の政策、欧米諸国の対応を調べてみよう。

に 529 万台、1980 年には 1104 万台となって、ついにアメリカを追い抜いた。輸出もアメリカ向けを中心に激増し、生産台数の半分以上を輸出するようになった。

同じ 1980 年、世界の GNP（国民総生産）総計に占める日本の比重は、約 10 % となった（アメリカと EU 諸国はそれぞれ約 20 %）。日本経済は巨大な規模に成長し、その国際的地位は飛躍的に高まった。しかし、加工貿易型の日本経済は輸出依存度が高く、ことに高度成長期以降の工業製品輸出は「集中豪雨的」とも表現されたように、相手国の産業に打撃を与え、失業を増大させた。欧米諸国は、高関税など貿易障壁をもうけたり、日本に輸出規制・輸入促進を求めるなど、激しい貿易摩擦が生じた。輸出を規制された日本の自動車産業は、ぞくぞくと欧米諸国に進出し、現地生産を開始した。こうした事情から、日本の自動車生産・輸出は、1980 年代後半から頭打ち傾向となった。生産台数は、1990 年に 1349 万台とピークに達したのち減少に転じ、1994 年には 14 年ぶりに世界第 1 位の座をあけわたした。

高度成長期の社会生活については、地域や学校の図書館で 1970 年代から 80 年代にかけての新聞や雑誌を読むとともに、図書館などには各種の統計資料を収蔵しているので、データを集めて分析してみるよい。こうした資料を通じて考えることで、歴史を具体的に実感してみよう。

産業・技術の発達と生活について調べよう

県や市町村の設置した産業に関する博物館・資料館のほか、企業の中にも、最新の製品と古い技術でつくられた製品を比較・展示している博物館や資料館を設置しているところも多いのでぜひ訪れてみよう。ピア ノや自動車、時計、自転車などのほか、カバンなどのユニークな資料館もできているので、身近な生活用品についても考えることができる。こうした博物館や資料館で、製品や技術の差異に目を向け、産業・技術の発展を体験しよう。

身近にある工場施設の見学や技術者への聞き取り調査を行なうことによって、技術革新やその社会的影響も考察できよう。それぞれの工業製品のデザインや付いている機能のちがいから世界の国々の生活意識や社会構造のちがいを考えることができよう。産業・技術に着目することで近現代の日本の変化を考察し、将来にわたる日本の産業立国の道を考えよう。

修 正 文

削除

歴史と生活 地域社会の変化—千葉県における軍事施設を例に探ってみよう

日本史の授業では、ふつう、日本という国が全体としてどのように変化してきたのかをおもに考えるが、より身近な地域社会も、日本全体の動きとともに大きな変化を経験してきた。それは思わぬかたちで、ある時期における、日本と世界の関係をくっきりと指し示すものともなっている。敗戦で大きな変容をせまられた軍事関係の施設は、そのような変化を見る材料として適しているものの一つだろう。ここでは千葉県の例をとりあげるが、自分の住んでいる町や近くの町に、軍事施設だったとされる場所があれば、文献資料だけでなく、新旧の写真や地図の比較、聞き取り調査や現地の巡^{じゅんけん}検などをおこなって調べてみてはどうだろうか。

歴史と生活 地域社会の変化—千葉県における軍事施設を例に探ってみよう

日本史の授業では、ふつう、日本という国が全体としてどのように変化してきたのかをおもに考えるが、より身近な地域社会も、日本全体の動きとともに大きな変化を経験してきた。その変化を調べるには、身近な村落や町の景観を材料にするのがよいだろう。古い村絵図に描かれた田畑・道路・川の変化など、また町並みの移り変わりも最適な対象となろう。時代的には身近で敗戦で大きな変容をせまられた軍事関係の施設も、変化を見る材料として適しているものの一つだろう。自分の住んでいる村落や町に、広大な敷地を持つ軍事施設だったとされる場所があれば、かつては何に利用され、現在はどのように利用されているか調べてみよう。

地域調査の方法

地域社会の特徴や地域のかかえる課題、地域社会の変化を調べる時は、下調べを十分に行い、ポイントをしぼろう。学校や地元の図書館に行き、区史や市町村史などの文献資料を調べるだけでなく、郷土史家の先生を紹介してもらうのもよいだろう。さらに、新旧の写真や地図の比較も大切な作業となる。明治時代から現代までのさまざまな写真や地図をみつけ出してその相異を比較したい。さらに地元の方から、戦前からある建物などを探したり、それが取り壊された理由など聞き取り、現地調査などをおこなうことも必要となる。質問したことは必ずメモにとり、テーブ

農林省が作成した資料

第二次世界大戦終結から4年後の1949（昭和24）年、農林省はある資料を作成している。その資料は「旧軍用地の実態調査」というもので、当時の日本社会にあって重要な課題であった、食料増産のために必要とされる開墾^{かいこん}可能な土地がどのくらいあるのかを、農林省の一つの部局である開拓局^{かいたく}が調査したものであった。市街地や山間地や海岸部など、開墾に適さない土地を除いた時、新たな開墾にむいている場所として、もはや必要とされなくなった軍事施設跡地に目がむけられたのは、ある意味で当然のことであつたろう。

レコーダーにとっておくことも必要なことである。取材の時はきちんと連絡を入れておきましょう。ビデオやカメラで調査場所や取材相手をとっておくと役立つことが多い。調査地域を自分で歩いてみると、微妙な道の高低や屈曲などに意味のあることが発見できる。

このような作業や調査の上で地域の変化を明確にし、その社会的背景を考え、自分自身の仮説を立ててみよう。そして、その仮説に基づく自分の地域年表や地誌を作成し、それまでの作業・調査・体験をまとめ上げレポートにすることが大切である。

農林省が作成した資料

インターネットで「軍用地」や「開墾」をキーワードにして検索してみると文献などのさまざまな資料情報があることがわかる。そこで、千葉県の例を取りあげてみる。

第二次世界大戦終結から4年後の1949（昭和24）年、農林省はある資料を作成している。その資料は「旧軍用地の実態調査」というもので、当時の日本社会にあって重要な課題であった、食料増産のために必要とされる開墾可能な土地がどのくらいあるのかを、農林省の一つの部局である開拓局が調査したものであった。市街地や山間地や海岸部など、開墾に適さない土地を除いた時、新たな開墾にむいてい

ここに示す表 1 は、千葉県にあった主な軍事施設を選び出したものである。開墾可能かどうかという視点で作成されたものであるので、敗戦時に千葉県にあった軍事施設のすべてをカバーしているわけではない。しかし、これらの軍事施設の面積を合計すると、8108 町歩（約 8000 ヘクタール）にもものぼる。農林省はこのうち 5913 町歩を開墾可能とみていた。

東京に近い千葉県に、なぜこのような広大な面積の軍事施設がつくられることになったのだろうか、またそれらの施設は、地域社会とどのような関係をもち、地域社会の変容^{へんよう}にどのような影響を与えたのだろうか。また戦後、これらの施設跡地はどのように使われてきたのだろうか。

修 正 文

る場所として、もはや必要とされなくなった軍事施設跡地に目がむけられたのは、ある意味で当然のことであつたろう。

ここに示す表 1 は、千葉県にあった主な軍事施設を選び出したものである。開墾可能かどうかという視点で作成されたものであるので、敗戦時に千葉県にあった軍事施設のすべてをカバーしているわけではない。しかし、これらの軍事施設の面積を合計すると、8108 町歩（約 8000 ヘクタール）にものぼる。農林省はこのうち 5913 町歩を開墾可能とみていた。

削除

習志野原

表 1 をみると、圧倒的な広さを誇っていたのが、下志津飛行場・下志津演習場と、
習志野演習場であることがわかる。ここでは習志野演習場に焦点をあててみよう。
この地域は、江戸時代においては、幕府直轄の放牧地の一部であったが、首都東
京の近くに位置する広大な原野は、維新後、新政府の注目するところとなり、皇居
の近くにあつて首都を警護する近衛兵の野営演習などに使用されていた。それまで
は、大和田原と呼ばれていたこの地域が、習志野、あるいは習志野原と呼ばれるよ
うになった由来については、1873（明治 6）年、同地域での演習を観戦した明治天
皇が「習志野原」と命名したとの記録がある。



[p.34 より p.32 へ移動]

習志野原

表1をみると、圧倒的な広さを誇っていたのが、^{ほこ}下志津飛行場・^{しもしづ}下志津演習場と、^{ならしの}習志野演習場であることがわかる。ここでは習志野演習場に^{しやうてん}焦点をあててみよう。この地域は、江戸時代においては、幕府直轄の放牧地の一部であったが、首都東京の近くに位置する広大な原野は、維新後、新政府の注目するところとなり、皇居の近くにあって首都を警護する^{このえへい}近衛兵の^{やえい}野営演習などに使用されていた。それまでは、大和田原と呼ばれていたこの地域が、習志野、あるいは習志野原と呼ばれるようになった由来については、1873（明治6）年、同地域での演習を観戦した明治天皇が「習志野原」と命名したとの記録がある。

翌年、政府は、旧幕府時代の牧^{まき}の部分に、さらに周辺の民有地も加えて、同地域を官有地として編入し、演習場とした。これは、現在の習志野市・八千代市・千葉市・船橋市にまたがるもので、東は大和田新田^{しんでん}、西は薬園台^{やくえんだい}、南は佐倉街道^{さくら}、北は小金原^{こがねはら}を境とする地域に相当する。図 1 を見てほしい。

首都に近い立地条件があったため、習志野は、首都や周辺の陸軍部隊や陸軍諸学校の演習地として、まずは整備が進んでいった。1882（明治 15）年時点の地図では、東京方面から演習に来る陸軍兵が一時的に宿泊する施設である、^{しょうしや}廠舎と呼ばれる建物が、演習場の西側に沿って七棟建てられているようすが確認できる。

表2 地図にあらわれた習志野の諸施設(No.の数字は左(図)に対応)

No.	施設	年		1870		1900		1950	
		施設	年	施設	年	施設	年	施設	年
1	鉄道連隊 第3大隊					明治10		昭和25	千葉工大
2	同倉庫					明治10			千葉工業高校
3	騎兵 第2連隊					明治10		昭和26	順天堂大学
4	第1、第2 騎兵連隊 司令部			明治25					習志野郵政局
5	陸軍衛戍 病院								国立習志野病院
6	第1騎兵 連隊			明治15			昭和23	東邦大学・東邦中高	東邦大学
7	第2騎兵 連隊			明治15		昭和17 戦車第3師団			日本大学
8	糧食庫			明治22		昭和16 解体	昭和27	東邦大学	東邦中高
9	高津旅舎 (西)			明治29				習志野警察署 山宮住宅 千葉大学研究所	習志野高校 公務員住宅
10	同(東)			明治29				千葉製糖所 (作業所)	
11	陸軍 旅舎 (東)			明治29				右松船客アパート	周鉄全居
12	騎兵学校			明治29				千葉製糖所支所 (農場)	習志野第四中学校 東習志野小・中学校
13	射撃場			明治29				東習志野幼稚園 東習志野保育所 山宮住宅	

(p.35 より p.33 へ移動)

翌年、政府は、旧幕府時代の牧の部分に、さらに周辺の民有地も加えて、同地域を官有地として編入し、演習場とした。これは、現在の習志野市・八千代市・千葉市・船橋市にまたがるもので、東は大和田新田、西は薬園台、南は佐倉街道、北は小金原を境とする地域に相当する。図1「習志野の軍事施設および演習場」を見てほしい。

首都に近い立地条件があったため、習志野は、首都や周辺の陸軍部隊や陸軍諸学校の演習地として、まずは整備が進んでいった。東京方面から演習に来る陸軍兵が一時的に宿泊する施設である 廠舎 と呼ばれる建物が、演習場の西側に沿って建てられていることがわかる。

□ 羅惹のなみだはてなし戦艦の故郷は遠く天はるかなり

●政友關東大會

來月下旬千葉に開催
政友會關東大會は來月下旬千葉町に
於て開催の筈にて十四日東京芝區三
軒亭に開催の關東代議士會に於て議

八幡祭

安房郡北佐田郷八幡神社例祭は十

習志野原の新聞記事(『東京日日新聞』房総版、
1917年9月16日付) 千葉県立中央図書館蔵。

この廠舎は、通常は東京近郊の部隊が演習に使用する際の仮兵舎として使われるが、戦争が起こると、異なる役割もになった。捕虜収容所としての役割である。習志野に建設された廠舎は、いくたびか改築や新築を繰り返し、日露戦争の時には、捕虜（当時の言葉では俘虜ふりょといった）となったロシア兵を収容する建物として、1905（明治 37）年 5 月から使用された。日本に連れてこられたロシア兵捕虜の数は約 7 万 2000 人に達したが、そのうちの 1 万 4000 人が、習志野演習場の廠舎の一部に建てられた収容所に移送されてきた。地域の新聞には、町民も最初は捕虜がやってくるのをよく思わなかったけれども、「馴れてみれば種族は変わっても人情に変わりはない、彼らも嗜き好んで来た訳ではなく、奮闘猛戦力つきて甲を脱いだ勇者である」と思えば憐憫の情もわくものだと、報じていた。

日露戦争前後の状況

この廠舎は、通常は東京近郊の部隊が演習に使用する際の仮兵舎^{かりへいしゃ}として使われるが、戦争が起こると、異なる役割もになった。捕虜^{ほりょ}収容所^{しゅうようじょ}としての役割である。習志野に建設された廠舎は、いくたびか改築や新築を繰り返し、日露戦争の時には、捕虜^{ほりょ}（当時の言葉では俘虜^{ふりょ}といった）となったロシア兵を収容する建物として、1905（明治 37）年 5 月から使用された。日本に連れてこられたロシア兵捕虜^{ほりょ}の数は約 7 万 2000 人に達したが、そのうちの 1 万 4000 人が、習志野演習場の廠舎の一部に建てられた収容所に移送されてきた。地域の新聞には、町民も最初は捕虜^{ほりょ}がやってくるのをよく思わなかったけれども、「馴^なれてみれば種族は変わっても人情に変わりはない、彼らも嗜^すき好^きんで来た訳^{わけ}ではなく、奮^{ふん}闘^{とう}猛^{もう}戦^{せん}力^{りょく}つきて甲^かを脱^だいだ勇者^{ゆうしゃ}である」と思えば憐憫^{れんぴん}の情もわくものだと、報じていた。

さらに新聞には、「来る 24 日より 27 日まで、毎日午前 11 時 47 分^{つだぬま}津田沼駅着列車にて、金沢収容の捕虜 570 余名ずつ合計 2300 余名^{はず}転送収容の筈なり」などといった、捕虜の輸送日程まで、詳細に報じられていた。総武鉄道^{そうぶ}の開通が 1894（明治 27）年で、津田沼駅の開業はその翌年であったので、すでにこの時点では、習志野にほど近い津田沼駅を使って、輸送されていたことがわかる。

少し時間はさかのぼるが、駅のあった津田沼は、習志野に最も近い市街地域の一つであったので、軍隊の動向に大きく影響される村であった。たとえば、1899（明治 32）年には、ロシアとの戦争に備えるための軍備拡充の一環として、習志野原^{いつかん}に、騎兵第一・第二旅団^{りよだん}の司令部をおくことが決定され、翌年から兵營の建設もはじまり、騎兵連隊の駐屯地^{ちゆうとん}となると、津田沼は活況^{かつきよう}を呈した。兵營建設のための職人たちが東北や北陸から多数やってくるようになり、家族持ちの将校のための下宿業^{げしゆく}も繁盛し、連隊に属する兵士たちの休日の外出や、面会に来る家族などの需要に応じるための店舗もたくさん生まれた。騎兵連隊は多数の馬を保有していたので、蹄鉄工^{ていてつ}や調教師^{ちようきよう}も付近に住むようになった。津田沼村が津田沼町となるのは、1903（明治 36）年のことである。

ロシア兵捕虜がやってきたのは、このように、軍隊の存在と町の市況に密接な関係のある地域であった。戦時には戦争をする単位としての軍隊の存在も、通常は人びとの生活と深く結びついていたことがわかる。

さらに新聞には、「来る 24 日より 27 日まで、毎日午前 11 時 47 分津田沼駅着列車にて、金沢収容の捕虜 570 余名ずつ合計 2300 余名転送収容の筈なり」などといった、捕虜の輸送日程まで、詳細に報じられていた。このように地域の図書館や資料館に保存されている古い新聞から情報を読み取ろう。総武鉄道の開通が 1894（明治 27）年で、津田沼駅の開業はその翌年であったので、すでにこの時点では、習志野にほど近い津田沼駅を使って、輸送されていたことがわかる。

少し時間はさかのぼるが、駅のあった津田沼は、習志野に最も近い市街地域の一つであったので、軍隊の動向に大きく影響される村であった。たとえば、1899（明治 32）年には、ロシアとの戦争に備えるための軍備拡充の一環として、習志野原に、騎兵第一・第二旅団の司令部をおくことが決定され、翌年から兵營の建設もはじまり、騎兵連隊の駐屯地となると、津田沼は活況を呈した。兵營建設のための職人たちが東北や北陸から多数やってくるようになり、家族持ちの将校のための下宿業も繁盛し、連隊に属する兵士たちの休日の外出や、面会に来る家族などの需要に応じるための店舗もたくさん生まれた。騎兵連隊は多数の馬を保有していたので、蹄鉄工や調教師も付近に住むようになった。津田沼村が津田沼町となるのは、1903（明治 36）年のことである。

ロシア兵捕虜がやってきたのは、このように、軍隊の存在と町の市況に密接な関係のある地域であった。戦時には戦争をする単位としての軍隊の存在も、通常は人びとの生活と深く結びついていたことがわかる。



習志野の軍事施設および演習場(神田文人「千葉県下の軍事施設及び演習場」より)

ドイツ軍捕虜と習志野

第一次世界大戦がはじまると日本は、英仏連合^{グンタオ}国側に立って参戦し、1914(大正3)年11月7日、ドイツの極東の根拠地である青島を占領した。ドイツ軍捕虜の総数は4220人を数え、そのうち約800人が、1915(大正4)年9月から、習志野演習場内に新築された廠舎に收容された。日露戦争の時とは違い、今度は、1919(大正8)年12月まで4年以上にわたって收容所での生活を余儀なくされたので、收容所は生活の場としての多数の機能を備えざるをえなくなっていた。

[p.33 より p.35 へ移動]

思て も 支い 難い つ り 大言 固まる 六 貨 八百二 入 平 七 七 八 二

◆房總半島繪行脚

白い雲が空に雲をべつて秋は流石に多感の浮遊しもの思はする日
 果しなく情話の
 に打たれて波々
 は口説いて和し
 て音聲を現
 づてゐる故園
 想しや活潑
 しや斯うして
 四の骨髄の
 勇士はさみし三度の秋を忍へた
 □ 難題のなみたてなし 難題の故郷は遠くはるかなり

◆政友会関東大会

政友会関東大会は来月下旬千代田に於て開演の筈にて十四日東京芝居三
 木亭に催の開演に於て諸

◆八幡祭り

房州一の祭禮
 安房郡北条町八幡神社例祭は十

習志野原の新聞記事(『東京日日新聞』房総版、
 1917年9月16日付) 千葉県立中央図書館蔵。

ドイツ軍捕虜と習志野

第一次世界大戦が始まると日本は、英仏連合側^{セントオ}に立って参戦し、1914(大正3)年11月7日、ドイツの極東の根拠地である青島を占領した。ドイツ軍捕虜の総数は4220人を数え、そのうち約800人が、1915(大正4)年9月から、習志野演習場内に新築された廠舎に収容された。日露戦争の時とは違い、今度は、1919(大正8)年12月まで4年以上にわたって収容所での生活を余儀なくされたので、収容所は生活の場としての多数の機能を備えざるをえなくなっていた。図版のように千葉県立中央図書館に保存してある当時の新聞を読むとドイツ捕虜の生活がわかる。新聞は、当時の社会を知る上でも、貴重な資料である。

収容所の敷地の総面積は9万5000平方メートル、そのうち8000平方メートルの
区画に将校用二棟、兵士用八棟などのバラックが建てられていた。周囲は鉄条網^{てつじょうもう}
で囲まれ、ドイツ式ハンドボール場1、体操場^{たいそう}2、サッカー場1、テニスコート3、
円形小音楽堂^{とさつば}1、屠殺場^{すいじば}1、製パン所1、炊事場^{よくしつ}1ほか、多数の作業場と浴室があ
った。習志野は広かったので、運動という点では捕虜たちの不満はなかったものの、
模範的な収容所として著名な板東^{ばんどう}（徳島県鳴門市^{なると}）収容所とは異なって、衛生や栄
養の点で不満が少なくなく、そのため、収容所側では、1917（大正6）年夏からは慰安^{いあん}
のために、毎月一回、所外の散歩を許し、オーケストラ・演劇・体育祭など、所内
における文化的な催^{ひんぱん}ものも頻繁に開かれた。

いっぽう、付近の住民や商店のなかには、ソーセージ、コンデンスミルク、マヨ
ネーズの製法を捕虜から学ぶもの、捕虜^{せんたくもの}の洗濯物を請け負って手間賃^{てまちな}を稼^{かせ}ぐものも
いた。

収容所の敷地の総面積は9万5000平方メートル、そのうち8000平方メートルの
区画に将校用二棟、兵士用八棟などのバラックが建てられていた。周囲は鉄条網^{てつじょうもう}
で囲まれ、ドイツ式ハンドボール場1、体操場^{たいそう}2、サッカー場1、テニスコート3、
円形小音楽堂1、屠場^{とじょう}1、製パン所1、炊事場^{すいじば}1ほか、多数の作業場と浴室^{よくしつ}があっ
た。習志野は広かったので、運動という点では捕虜たちの不満はなかったものの、
模範的な収容所として著名な板東^{ばんどう}（徳島県鳴門市）収容所とは異なると
衛生や栄養^{いあん}の点で不満が少なくなく、そのため、収容所側では、1917（大正6）年夏からは慰安
のために、毎月一回、所外の散歩を許し、オーケストラ・演劇・体育祭など、所内
における文化的な催^{ひんぱん}ものも頻繁に開かれた。

いっぽう、付近の住民や商店のなかには、ソーセージ、コンデンスミルク、マヨ
ネーズの製法を捕虜から学ぶもの、捕虜^{せんたくもの}の洗濯物を請け負って手間賃^{て まちん}を稼^{かせ}ぐものも
いた。

その後の習志野

表2に示すように、敗戦までに多くの軍事施設が習志野周辺に設置された。1907（明治40）年に設置された鉄道連隊第三大隊や、1916（大正5）年の騎兵学校などがその主なものである。千葉県下には、表1からもわかるように、より多くの施設が散在していた。これらの施設は、敗戦後どうなったのだろうか。習志野演習場でいえば、戦後は食料増産のための開拓地に^{へんぼう}変貌した。外地から引揚げてきた^{ひきあげしや}引揚者の多くは満足な勤め先もなかったもので、民間人、軍人・軍属の引揚者の一部は、1945（昭和20）年9月から早くも開拓に取り組んでいる。しかし、1946（昭和21）年4月には、旧日本軍にかわって、連合国軍が旧習志野演習場の一部を使用することになり、開拓団の一部は立ち退きを迫られた。

その後の習志野

表 2 に示すように、敗戦までに多くの軍事施設が習志野周辺に設置された。1907（明治 40）年に設置された鉄道連隊第三大隊や、1916（大正 5）年の騎兵学校などがその主なものである。千葉県下には、表 1 からわかるように、より多くの施設が散在していた。これらの施設は、敗戦後どうなったのだろうか。習志野演習場でいえば、戦後は食料増産のための開拓地に^{へんぼう}変貌した。外地から引揚げてきた^{ひきあげしゃ}引揚者の多くは満足な勤め先もなかったもので、民間人、軍人・軍属の引揚者の一部は、1945（昭和 20）年 9 月から早くも開拓に取り組んでいる。しかし、1946（昭和 21）年 4 月には、旧日本軍にかわって、連合国軍が旧習志野演習場の一部を使用することになり、開拓団の一部は立ち退きを迫られた。

旧演習場は、連合国軍が演習地として使用したあと、自衛隊^{じ えいたい}発足後は、陸上自衛隊^{ちゅうとん ぶたい}習志野駐屯部隊の演習場となり、旧演習場西側にあった騎兵^{き へい}学校は習志野駐屯地となった。

旧演習場の北側には住宅公団^{たかつ}の高津団地が造成され、この地域は近郊住宅地の様相^{てい}も呈してきた。旧演習場の南西にあった騎兵連隊の場所には、日本大学生産工学部や東邦大学理学部が新たに設立され、この周辺は文教地区としての性格も持つようになった。このように、近代に入って 70 年あまりの短い期間においても、演習場を中心としてさまざまな歴史が地域に刻まれていたことがわかる。

旧演習場は、連合国軍が演習地として使用したあと、自衛隊^{じえいたい}発足後は、陸上自衛隊^{きへい}習志野駐屯部隊^{ちゅうとんぶたい}の演習場となり、旧演習場西側にあった騎兵学校は習志野駐屯地となった。

旧演習場の北側には日本の高度成長とともに住宅公団^{たかつ}の高津団地が造成され、この地域は近郊住宅地の様相も呈^{てい}してきた。旧演習場の南西にあった騎兵連隊の場所には、日本大学生産工学部や東邦大学理学部が新たに設立され、この周辺は文教地区としての性格も持つようになった。このように、近代に入って 70 年あまりの短い期間においても、演習場を中心としてさまざまな歴史が地域に刻まれていたことがわかる。

その他にも、古地図を見比べて街道といわれる道路が現在はどうなっているか、またその後に付近にバイパス道路や高速道路、鉄道・橋などがつくられていれば、地域がどのように変化したかを調べてみよう。こうした調査により、戦後日本の発展のなかでどのような変貌をとげたかを考えてみよう。